

資 料

インターネットでめぐるフランス革命と ナポレオン戦争関係の史跡

軽 部 恵 子

キーワード：フランス革命，ナポレオン戦争，ウィーン会議，
歴史学習，バーチャル・ツアー

フランス革命とそれに続くナポレオン戦争は、フランスの絶対主義王政を打倒し、市民社会を誕生させた。また、ネーション・ステート（nation state。「国民国家」，「民族国家」と訳される）を生み、国家への帰属意識と独立・防衛を求めるナショナリズムが広がった。他に、民法典など法律の整備，メートル法制定を含む度量衡の統一など，近代国家の形成が進んだ。このように，フランス革命とナポレオン戦争は，法律，法制史，経済史，人権の歴史，科学史，国際関係，国際政治など，幅広い分野に関係している。

一方，フランス革命期に関する大学生の知識は千差万別である。「ルイ16世」「王妃マリー・アントワネット」「ギロチン」といった断片的な知識しか持たない者もいれば，歴史の大まかな流れをきちんと把握している者もいる。この差は，文部科学省の指導要領が一時期大幅に削減されたこと，少子化で受験生が減少し大学の入学試験に世界史を受験せずに済む場合が増えたこと（いわゆる「ゆとり教育」），世界史を他の科目で履修したと見なすカリキュラムが全国の高校で広く行われたこと（いわゆる「世界史未履修問題」）などが原因として挙げられよう。特定の公式や公理を知らないと一歩も前へ進めない理系の科目と異なり，文系の科目は内容がよくわからないままでもとりあえず講義を受けられる。その結果，一部の受講生は歴史の知識が不足したまま

各種の科目を受講し、大学教員は基礎知識にばらつきのある学生を1つの教室で教えなければならない。

だが、今日ではインターネットという便利な「道具」が普及している。高校までの授業で使い方を教わるか、家庭で家族が利用しているため、大学入学までにインターネットを全く利用したことのない新入生はおそらく皆無だろう。そして、国内外の史跡や博物館は独自のホームページを持ち、歴史の簡潔な解説を提供し、貴重なコレクションの写真などを公開している。参考文献リストや有益なリンク集を持つホームページも多い。教員からみれば、すばらしい補助教材がネット上に多数存在し、ほぼ無料で利用できる状態にあるといえよう。

フランス革命の史跡はフランス国内のものが最も多いが、ナポレオン戦争とウィーン会議に関する史跡はイタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギー、スペインなど、ヨーロッパ各地に散らばっている。文物に限っていえば、大西洋を越えて一部がアメリカにも渡っている。インターネットを利用すれば、一瞬のうちに世界各地の史跡を訪問し、文物を鑑賞することができる。

本稿は、インターネットを通じてフランス革命からナポレオン戦争、ウィーン会議に至る史跡等を紹介し、とくに文系の学部 に在籍する大学生の一般的な理解力向上と教員の講義運営を支援するために執筆された。史跡、とくにフランス国内のものは、革命が進展する経緯にほぼ沿った形で並べた。つまり、本稿に沿って史跡等の画像を紹介すれば、フランス革命の流れをかいつまんで説明できるようになっている。

ただし、バステュー襲撃以前のできごと、すなわちルソーらの啓蒙思想、アメリカ独立革命への支援、三部会開催の要求、1789年6月20日の「テニスコート（球技場）の誓い」は思い切って省略した。7月14日のバステュー襲撃があまりに有名なためと、革命に至る背景の説明が長くなるためである。本稿の大きな目的は、教室のスクリーン上に史跡や文物等を提示して、学生に視覚から刺激を与え、歴史に無関心だった者、歴史の学習は嫌いあるいは退屈だったという者の意識を少しでも変えることにある。

また、革命勢力による権力争い、すなわち王党派とジロンド派の没落、ジャコバン・クラブの独裁から1794年7月のテルミドール反動にいたる経緯は割愛した。つまり、本稿が扱うフランス革命中の主なできごとは、バスティュー襲撃、ルイ16世一家のテュイルリー宮殿への移送、ヴァレンヌ逃亡、一家のタンブル塔への移送、ルイ16世の裁判と処刑、王妃マリー・アントワネットの裁判と処刑、ジャコバン・クラブの独裁とテルミドール反動に限った。これらのできごとだけでも、大学生とくに1-2年次生がフランス革命の大きな流れを理解するには十分であろう。革命中のできごとをより詳しく知りたい人には、立川孝一『フランス革命』（中央公論新社、1989年）を薦める。

ジロンド派の没落、ジャコバン・クラブの台頭と破滅を詳しく知りたい人には、フュレ、オズーフ編『フランス革命事典3 人物II』（みすず書房、1990年）にくわえて、ギタール著『フランス革命下の一市民の日記』（中央公論社、1980年）を読んでもらいたい。1791年1月26日に始まるギタールの日記には、処刑された人々の名前や経歴が詳細に記されている。くわえて、ラスコー洞窟内の絵のように単純な線で描かれたイラストが妙に生々しい。とくに、後ろ手に縛られギロチン台の上に並べられた人々を描いた「ジロンド党員の処刑」（p.167）は、革命の騒然とした雰囲気、というより狂気そのものを示しており、必見である。

ナポレオン戦争関連の史跡等についても説明したい。ナポレオン戦争の主要な戦闘は、第1回イタリア遠征（1796-1797）に始まり、エジプト遠征（1788-1799）、第2回イタリア遠征（1800-1801）、トラファルガーの海戦（1805）、アウステルリッツの三帝会戦（1805）、大陸封鎖令（ベルリン勅令）（1806）、マドリッド市民の蜂起（1808）、モスクワ遠征（1812）、ライプツィヒの戦い（1813）、ワーテルローの戦い（1815）が挙げられる。その間に、皇帝への即位（1804）、エルバ島への配流（1814）、英領セントヘレナ島への流刑（1815）があった。これら全てを網羅すると膨大な量になるため、思い切って取捨選択した。とくに、マドリッド市民の蜂起は「小さい戦争」を意味するguerrillaの語を生んだできごとで、本稿に含めたかったが、別稿に譲り

たい。

他方、ナポレオン関連した有名なエピソードとそれに関する文物等は、ナポレオン戦争そのものに関係なくとも積極的に取り上げた。これは、歴史学習を初学者にとって楽しいものにすると同時に、ナポレオン戦争の影響が政治・軍事はもとより、経済・社会・文化と多岐にわたることを学生に実感させるためである。たとえば、ナポレオン戦争に由来する語句は、先述のゲリラ、冬将軍、百日天下、one's Waterloo（「大失敗」の意）など、いくつもある。それから、第1次世界大戦の終戦記念日にあたる11月11日（1918年にドイツが休戦協定に署名した日）はイギリスでRemembrance Dayとして戦死者の追悼行事が行われるが、Poppy Dayとも呼ばれる。毎年10月からイギリスの議員やニュース・キャスターたちが赤いひなげし（scarlet corn poppy）の紙の造花を胸に付けるのは、ナポレオン戦争で荒れ果てた土地で戦死者の体の周辺に咲いたのが赤いひなげしだったからという（BBC, “Remembrance Day-Poppy Day”, <http://www.bbc.co.uk/dna/h2g2/A653924>を参照）。

本稿執筆にあたって参照した参考文献の大半は、比較的安価で、人物画・風景画・写真・年表・地図・イラスト等を多数紹介している。同時に、重要な事実関係が簡潔にまとめられ、有名な歴史上のエピソードの真偽、背景が丁寧に紹介されている。それゆえ、学生にとっては読みやすく、教員にとっては講義の準備または参考資料の作成の上で大いに役立つであろう。

本文で紹介するサイトは、原則として現地の言語か英語かあるいは双方で名称を記載した。博物館や史跡の管理団体のサイトがない場合、観光局などの政府・地方自治体による案内か、民間の観光案内のサイトを紹介した。ただし、公的機関が日本語で観光案内を書いている場合、内容が非常にわかりにくいものは掲げなかった。また、検索エンジンでキーワード検索をすると個人の旅行記、ブログ、写真の投稿もヒットするが、旅行記やブログは作成者の主観が多々入っているので、本稿では紹介しなかった。各地の史跡を撮影した写真の投稿を見るのは読者の自由であるが、解説の付いている観光案内サイトの方が有益であると判断し、やはり紹介しなかった。サイトのアドレ

スそのものを入れても検索画面に結果が出てこない場合は、施設の名前を検索エンジンに入力してほしい。綴りに誤りがなくても、何らかの理由で検索がヒットしないことはある。

本稿で紹介した史跡や博物館等を実際に訪れたい人は、最新の安全情報を外務省、各国大使館、外国メディアのサイトで確認するよう勧めたい。基本的に治安状況がとくに悪い地域はないが、大雨・大雪などの悪天候、デモンストレーションや暴動、ストライキによる公共交通機関の停滞はいつでも起きえるからである。

最後に、日本語では地図、国語辞典、世界史の教科書・参考書、条約集、新聞記事で、外国の国名と地名のカタカナ表記が異なることが少なからずあるが、本稿では全て地図の表記に従った。たとえば、Yugoslaviaは地図で「ユーゴスラビア」となるが、岩波書店の『広辞苑』、有斐閣の『国際条約集』、山川出版社の世界史の教科書・辞典類では「ユーゴスラヴィア」と表記される。他には、Bosnia Herzegovina（ボスニア・ヘルツェゴビナ）、Kosovo（コソボ）、Slovenia（スロベニア）、Slovakia（スロバキア）などが挙げられる。また、Greeceを地図は「ギリシャ」、『広辞苑』は「ギリシア」と表記する。それから、マスメディアは一般に「ヴ」を使わない。Versaillesの地図表記は「ヴェルサイユ」だが、新聞は「ベルサイユ」と表記する。Genève（フランス語）・Geneva（英語）も同様に、地図・国語辞典・山川出版社・条約集が「ジュネーヴ」で、新聞は「ジュネーブ」である。ただし、スペイン語のvの綴りは発音が元々bの音なので、「ヴ」を使う必要はない。

<参考文献>

青木やよひ『図説ベートーヴェン：愛と創造の生涯』河出書房新社 1995年
安芸光男『クラシックの名曲101』新書館 2000年
「アマデウス」『週刊20世紀シネマ館』1985年 昭和60年 別巻2 No.52
(2005年)
石井美樹子『図説ヨーロッパの王妃』河出書房新社 2006年

- 江村洋『ハプスブルク家』講談社 1990年
- 江村洋『ハプスブルク家の女たち』講談社 1993年
- 小畑恒夫監修『オペラの名作』ナツメ社 2007年
- 小塩節（おしお・たかし）『モーツァルトへの旅：音楽と人生に出会う』光文社 2006年
- 加賀美雅弘『ハプスブルク帝国を旅する』講談社 1997年
- 加藤雅彦『図説ハプスブルク帝国』河出書房新社 1995年
- 加藤雅彦『図説ヨーロッパの王朝』河出書房新社 2005年
- 菊池良生『神聖ローマ帝国』講談社 2003年
- 菊池良生『戦うハプスブルク家』講談社 1995年
- セレストン・ギタール著，レイモン・オペール編，河盛好藏監訳『フランス革命下の一市民の日記』中央公論社 1980年
- 木之下晃・堀内修『ベートーヴェンへの旅』新潮社 1991年
- 木之下晃・堀内修『モーツァルトへの旅』新潮社 1991年
- パウル・クリストフ編，藤川芳朗訳『マリー・アントワネットとマリア・テレジア：秘密の往復書簡』岩波書店 2002年
- 国際地学協会『国旗と地図』国際地学協会 2004年
- 後藤真理子『図説モーツァルト：その生涯とミステリー』河出書房新社 2006年
- 小島英熙『ルーヴル：美と権力の物語』丸善 1994年
- 小宮正安『ハプスブルク家の宮殿』講談社 2004年
- クレーン・コンスタン著，伊藤俊治監修，遠藤ゆかり訳『ヴェルサイユ宮殿の歴史』創元社 2004年
- イヴァン・コンボー著，小林茂訳『パリの歴史』新版 白水社 2002年
- 『最新版世界遺産』No.8「ウィーンの歴史地区」講談社 2010年
- 『週刊世界遺産』No.13「ヴェルサイユ宮殿と庭園」講談社 2004年
- 柴宜弘『図説バルカンの歴史』改訂新版 河出書房新社 2006年
- 芝生瑞和（しばう・みつかず）編『図説フランス革命』河出書房新社 1989

年

新村出編『広辞苑』第6版 岩波書店 2008年

立川孝一『フランス革命』中央公論社 1989年

田之倉稔『モーツァルトの台本作者：ロレンツォ・ダ・ポンテの生涯』平凡社 2010年

遅塚忠躬『ヨーロッパの革命』ビジュアル版 世界の歴史14 講談社 1985年

シュテファン・ツヴァイク著、中野京子訳『マリー・アントワネット』全2巻 角川書店 2007年

辻原康夫『図説 国旗の世界史』河出書房新社 2003年

土田英三郎『ベートーヴェン』音楽之友社 2005年

帝国書院『最新基本地図 ―世界・日本― 34訂版』帝国書院 2009年

遠山一行『ショパン：カラー版作曲家の生涯』新潮社 1988年

フランソワ・トレモリエール、カトリース・リシ著、日本語版監修樺山紘一『ラールス図説世界史人物百科Ⅲ フランス革命―世界大戦前夜』原書房 2005年

中野京子『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』光文社 2008年

西村理監修『CD付き もう一度学びたいオペラ』西東社 2007年

西村理監修『CD付き もう一度学びたいクラシック』西東社 2005年

アルバート・A・ノフィ著、諸岡良史訳『ワーテルロー戦役』コイノニア社 2004年

長谷川輝夫『聖なる王権ブルボン家』講談社 2002年

ミシェル・パルティ著、海老沢敏監修、高野優訳『モーツァルト』創元社 1991年

藤本ひとみ『マリー・アントワネットの生涯』中央公論社 1998年

平野昭『ベートーヴェン：カラー版作曲家の生涯』新潮社 1985年

ジャン＝クリスチャン・ブティフィス著、玉田敦子他訳『ルイ十六世』全2巻 中央公論新社 2008年

フランソワ・フェレ, モナ・オズーフ編『フランス革命事典3 人物Ⅱ』み
すず書房, 1999年

T.C.W.ブラニング著, 天野知恵子訳『ヨーロッパ史入門 フランス革命』岩波
書店 2005年

オリヴィエ・ブラン著, 小宮正弘訳『一五〇通の最後の手紙：フランス革命
の断頭台から』朝日新聞社 1989年

マルク・ブウロワゾ著, 遅塚忠躬訳『ロベスピエール』白水社 1958年
「ベルサイユのばら」を歩く会編, 池田理代子プロダクション協力『「ベルサ
イユのばら」の街歩き』JTBパブリッシング 2002年

堀田善衛『運命・黒い絵』朝日新聞社 1994年

まがいまさこ・堀洋子『もう一度学びたい世界の歴史』西東社 2005年

水村光男監修『図説 この「戦い」が世界史を変えた』青春出版社 2003年
三宅理一『パリのグランド・デザイン』中央公論新社 2010年

宮下規久朗『不朽の名画を読み解く』ナツメ社 2010年

両角良彦『1812年の雪』筑摩書房 1980年

山口昌子『エリゼ宮物語』産経新聞出版 2007年

吉田進『ラ・マルセイエーズ物語』中央公論新社 1994年

エヴリーヌ・ルヴェ著, 塚本哲也監修, 遠藤ゆかり訳『王妃マリー・アント
ワネット』創元社 2001年

ディエリー・レンツ著, 福井憲彦監修, 遠藤ゆかり訳『ナポレオンの生涯』
創元社 1999年

「フィガロの結婚」『Mozart』No.6 講談社 2010年

エリカ・ラングミュア著, 高橋裕子訳『ナショナル・ギャラリー・コンパニ
オン・ガイド』(ロンドン) ナショナル・ギャラリー 2004年

ベアトリクス・ソール, ダニエル・メイエール著『ヴェルサイユ見学ガイド』
Versailles: Art Lys, 2007

Doyle, William. *The Oxford History of the French Revolution*. 2nd ed. Lon-
don: Oxford University Press, 2002.

Darlow, Mark. “Beaumarchais and Politics.” *The Royal Opera House Presents The Royal Opera: Le Nozze di Figaro*. London: The Royal Opera House, 2008.

Fraser, Antonia. *Marie Antoinette: The Journey*. London: Phoenix, 2001.

Lever, Evelyne. *Marie Antoinette*. Paris: Reunion des Musées Nationaux, 2006.

Parkinson, Richard. *The Rosetta Stone*. London: The British Museum Press, 2005.

Salmon, Xavier. *Marie-Antoinette: Album de l'exposition*. Paris: RMN, 2008.

Rédaction: René Tasquin. *Le Champ de Bataille de Waterloo Pas a Pas: Le Guide de Votre Visite*. Bruxelles: Edition Interprint, 1991.

René Tasquin, ed. *The Battlefield of Waterloo Step by Step: The Guide of Your Visit*. Brussels: Editior Interprint, 1991.

Koester, Thomas. *50 Artists You Should Know*. London: Prestel, 2006.

Eisler, Benita. *Chopin's Funeral*. London: ABACUS, 2003.

Zamoyiski, Adam. *Chopin: Prince of the Romantics*. London: Harper Press, 2010.

<参考サイト> ※各都市の観光案内は項目ごとにつけた。

* 外務省海外安全ホームページ

<http://www.anzen.mofa.go.jp/>

* 帝国書院

<http://www.teikokushoin.co.jp/>

* フランス観光開発機構公式サイト

<http://jp.franceguide.com/>

* ベルギー・フランダース政府観光局

<http://www.visitflanders.jp/>

*ベルギー観光局ワロン・ブリュッセル

<http://www.belgium-travel.jp/>

*オーストリア政府観光局

<http://www.austria.info/jp>

*ドイツ観光局

<http://www.visit-germany.jp/>

*UK in Japan 駐日英国大使館

<http://ukinjapan.fco.gov.uk/ja>

*「ようこそ、イギリスへ！」Visit Britain—British Tourist Authority

<http://www.visitbritain.com/ja/Jp/>

1. フランス国内の史跡等

(1) ヴェルサイユ宮殿 (Château de Versailles/The Pallace of Versailles)

<http://www.chateauversailles.fr/> (フランス語版)

<http://en.chateauversailles.fr/homepage> (英語版)

パリ郊外のイル・ド・フランス (Île de France) にある。フランス絶対王政を象徴する宮殿で、壮麗かつ広大という形容詞がまさに当てはまる。莫大な費用と1662年から50年間という時間をかけて造られた。ヴェルサイユ宮殿公式ホームページにかつて日本語版があったが削除され、新たに中国語版が加えられた。現在は、フランス語、スペイン語、英語、中国語版の4カ国語で運営されている。

宮殿内には他に、王室礼拝堂 (Chapelle)、王立オペラ劇場 (Opéra Royal de Versailles)、大居室 (Grand Appartement)、王妃の居室 (Appartement de la Reine)、幾何学的なデザインが有名な庭園 (Les Jardins) がある。天井画、壁際におかれた彫刻、タペストリーなど、宮殿内のあらゆる場所に芸術品が置かれており、ルイ14世の威光がしのばれる。

1770年5月、オーストリアから14歳の美しくも幼い花嫁がヴェルサイユに到着した。長年ヨーロッパの覇権を争ってきたハプスブルク家とブルボン家

がその対立に終止符を打ったことは、「ヨーロッパの外交革命」とよばれた。両国の新たな結びつきの証として、王太子ルイ・オーギュスト (Louis August。後のルイ16世) とハプスブルク家の皇女マリー・アントーニア (フランス語読みマリー・アントワネット Marie-Antoinette) の婚礼が宮殿内の王室礼拝堂で、婚礼の宴が王立オペラ劇場で催された。

有名な「鏡の間 (回廊)」(Galerie des Glaces) は、フランス宮廷がルーヴル宮から移転してきた4年後の1686年に完成した。全長73mの回廊は、壁の大鏡と54のクリスタル製シャンデリアで輝く鏡の間を、ルイ14世は公式祭典や外国の大使謁見に好んで使った (『週刊世界遺産』No.13, pp.7-8)。現在あるシャンデリアと大燭台は、1770年に王太子成婚の祝宴のために準備された装飾を復元したものである (同上, p.9)。

フランス革命後も、鏡の間はたびたび歴史の舞台となった。1919年6月28日、第1次世界大戦の講和条約であるヴェルサイユ条約がここで署名されたことはよく知られている。1870-1871年にプロイセン-フランス戦争が行われた際、プロイセン軍がこの大広間を野戦病院にしたこともあった (同上, p.34)。

王立オペラ劇場では音楽会がたびたび開かれた。当時、フランスの宮廷音楽家たちはイタリア出身のピッチニニ派とドイツ出身のグルック派に分かれ、互いに争っていたが、オーストリア出身のマリー・アントワネットは同じドイツ語圏のグルックを応援した (ルヴェ, p.27)。王妃の態度は、フランス貴族の反発を招く一因となったかもしれない。

<関連サイト>

*** CBS News (USA) “Versailles Opera House Reopens”**

<http://www.cbc.ca/arts/artdesign/story/2009/09/22/versailles-opera.html>

(以下はヴェルサイユ宮殿公式ホームページ内)

*** Interactive Map**

<http://en.chateauversailles.fr/templates/versailles/map/MapMain.php>

*** Gardens and Parks of the Chateau**

<http://en.chateauversailles.fr/gardens-and-park-of-the-chateau->

*Versailles during the centuries

<http://en.chateauversailles.fr/history->

(2) トリアノン宮殿 (Trianon)

*The Grand Trianon (大トリアノン)

<http://en.chateauversailles.fr/grand-trianon->

*The Marie-Antoinette's Estate (マリー・アントワネットの大農園)

<http://en.chateauversailles.fr/marie-antoinettes-estate>

ヴェルサイユ宮殿の離宮に大トリアノン (Grand Trianon) と小トリアノン (Petit Trianon) がある。小村だったトリアノンを別荘に変えたのはルイ14世だった。

大トリアノンは1687-1688年に建設されたが、ルイ14世が家族と過ごした離宮として機能した。フランス革命中に荒れ果てたが修復され、ナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) は大トリアノンを愛用したという。

小トリアノンは1762-1768年に建設された。ルイ15世が愛妾ポンパドゥール侯爵夫人 (Madame de Pompadour, 1721-1764) のために建てさせた。だが、政務に自ら積極的に関わっていた夫人は完成を見ることなく、42歳で亡くなった。ブルジョワ階級出身で教養と政治的野心に溢れた夫人は、肖像画の背景に革装の『法の精神』等の書籍が描かれるほどその知性を賞賛されていた (『週刊世界遺産』No.13, p.28の図を参照)。ポンパドゥール夫人は啓蒙思想家のヴォルテール (Voltare。本名François Marie Arouet, 1694-1778) と親しかったこともよく知られている。芸術的センスにもすぐれ、セーヴル磁器を奨励し、芸術家たちのパトロンになった。もっとも、建築好きの夫人が各地の城館造りにかけた莫大な費用が革命の遠因の1つになったともいわれる。箱物はどこの国でもいつの時代も財政赤字の原因ということか。

祖父のルイ15世から小トリアノンを受け継いだルイ16世は、それを妻に与えた。王妃マリー・アントワネットは1783年に人工の農村を造らせ、召使い

たちを農民に扮装させ、実際に家畜を飼わせた（同、p.20）。現在、田舎家のアモー（Le Hameau）は大規模な修復が済み、一般に公開されている。敷地内には、王妃がこよなく愛したイギリス式庭園や、恋人のスウェーデン伯爵フェルセン（Axel de Fersen, 1755-1810）と密会したといわれるあずまやもある。

宮殿の儀礼と式典にしばられた生活を嫌っていた王妃は、「ここでは私が私自身でいられる」（Ici, je suis moi.）と小トリアノンに引きこもり、謁見など王妃としての政務を怠った。ヴェルサイユ宮殿から小トリアノンへはたった2 km程だが、宮殿内を走る有料のプティ・トラム（Petit Tram）に乗って移動すると、特急電車に乗って都会から田舎へバカンスに出かけるような錯覚に陥る。それぐらい、小トリアノンは別世界だった。

当時のヴェルサイユ宮殿と庭園は一般に公開され、礼儀に適った服装さえしていれば身分を問わず誰でも入ることができ、国民は国王の生活を見学した（コンスタン、pp.79-80）。ルイ14世が見物客に自分の旺盛な食欲を見せつけたことはよく知られている。やがて、ルイ15世の頃から国王は公式の晩餐以外は少人数での小規模な晩餐をとるようになった（同上、p.84）。フランスの一般民衆が国王の顔を直接見られなくなったことも、革命の背景にあるかもしれない。

実際、ルイ16世妃が小トリアノンに引きこもったことは、宮廷の貴族に評判が悪かった。王妃が伴った人物は、長女のマリー・テレーズ・シャルロット（Marie-Thérèse Charlotte, 1778-1851）、次男のルイ・シャルル（Louis-Charles, 1785-1795）、取巻きのポリニャック夫人（Madame de Polin-gac, 1749-1793）、義妹エリザベート（Madame Elisabeth, 1764-1794。ルイ16世の末の妹）など、ごく少人数に限られた。夫のルイ16世でさえ、国王用の寝室に泊まったことがないという噂が流れた（ルヴェ、p.54）。なお、長男の王太子ルイ・ジョゼフ（Louis Joseph Xavier François, 1781-1789）は病氣療養中であった。小トリアノンに滞在したマリー・アントワネットは、多額の借金を作ってきた賭け事に手を出さなくなり、夜遊びもやめたが、離

宮の建設費と維持費，王妃としての義務の放棄は，フランス国民の怒りと貴族の反発を買った。

小トリアノンの庭園には王妃専用の小劇場が造られ，1780年6月1日に披露された。王妃は，享樂的な義弟アルトワ伯（ルイ16世の次弟。後のシャルル10世。後述）や親しい友人たちと貴族一座を結成して懸命に練習し，国王とごく少数の貴族たちを招いて公演した。演目には貴族をちゃかした内容のものもあったが，政治的な意味はなかったようである（同上，pp.56-57参照）。王妃は自分の好きなことだけに熱中し，自分の言動がどのように受け取られるかを考えていなかった。

オーストリアの女帝マリア・テレジアの娘として何不自由なく育ち，ダンスや歌が上手で，優雅な身のこなしを誰からも賞賛されたマリー・アントワネットは，子どもの頃から勉強が大嫌いだった。努力せずしてフランス王妃となった女性に，宮殿の外に迫る嵐など全く感じられなかったに違いない。それだけヴェルサイユ宮殿が広大で，現実を隔絶していたともいえよう。1777年4月，兄のヨーゼフ2世が，全く子の生まれない娘夫婦を心配した母の命令でフランスを訪問し，その機会に地方を視察して，20枚にのぼる妹への手紙で革命の可能性を忠告した。だが，それも無邪気な妹の心には届かなかった（クリストフ編，pp.261-262，編者注，p.263 注1，p.281 注2を参照）。
＜関連サイト＞

（以下はいずれもヴェルサイユ宮殿公式サイトの一部）

*Louis XVI（ルイ16世）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/louis-xvi>

*Marie-Antoinette（マリー・アントワネット）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/marie-antoinette>

*Madame de Polignac（ポリニャック夫人）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/ma->

dame-de-polignac

*Axel de Fersen (フェルセン伯爵)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/axel-de-ferсен->

*Louis XV (ルイ15世)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xv-time/louis-xv>

*Madame de Pompadour (ポンパドゥール夫人)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xv-time/madame-de-pompadour>

*Madame du Barry (デュ・バリー夫人)

http://en.chateauversailles.fr/index.php?option=com_cdvfiche&idf=CA1C6E06-E9B0-050C-D2E2-8173D473CC0F

ルイ15世の最後の愛人 (1743－1793)。王太子妃時代のマリー・アントワネットと対立した。デュ・バリー夫人は、宮廷で最も地位の高い女性だった王太子妃に無視され続けているとルイ15世に訴えたが、若いアントワネットは国王の3人の娘 (アントワネットから見て義理の叔母) に唆され、デュ・バリー夫人を無視し続けた。この問題は、危うくフランスとオーストリアの外交問題に発展するところであった(クリストフ編, pp.12, 30－31, 35－36, 47, 140を参照)。

1774年5月にルイ15世が天然痘で崩御すると、デュ・バリー夫人は宮廷から引退させられた。フランス革命が始まると夫人に国民の憎しみが集まり、1793年10月に断頭台で処刑された。

ここに使われたデュ・バリー夫人の肖像画は、朝早く部屋着 (négligé) のままコーヒーを飲む場面を描いたものである (ルヴェ, p.27)。しどけない姿と目覚めきってない顔の表情が艶めかしい。女性関係の派手だったルイ15世を虜にしたのが容易に理解できる。

(3) ルーヴル美術館 (Musée du Louvre)

<http://www.louvre.or.jp/>

12世紀後半に城塞として建てられ、16世紀にフランソワ1世 (François I) がルネッサンス様式の宮殿に改築した。レオナルド・ダヴィンチのパトロンだったフランソワ1世は、「モナリザ」や「聖母子と聖アンナ」などを所蔵していた。革命さなかの1793年、王室のコレクションを展示する小さい美術館として作り替えられた。その後、ナポレオンが戦利品を展示するようになり、ルーヴル宮は改築された。

1989年、革命200周年を記念して、当時のミッテラン大統領 (故人) がルーヴル改造計画を発表した。中庭にはガラスのピラミッドが完成し、半地下の入り口である「ナポレオン・ホール」にまで続く。当初、ガラスのピラミッドのデザインは賛否両論を呼んだが、今ではすっかりなじんでいる。半地下では、ルーヴル改造工事中に発見された中世ルーヴルの遺跡 (Le Vieux Louvre de Philippe Auguste et de Charles V) も見られる。

ルーヴル美術館が所蔵するフランス革命およびナポレオン戦争に関した絵画は、巨大なものが多い。その代表格は「ナポレオン1世の戴冠」(Le Sacré de Napoléon 1^{er}) だろう。これは、新古典主義の画家ダヴィッド (Jacques-Louis David, 1748-1825) が1804年にノートル・ダム大聖堂で挙行されたナポレオン1世の戴冠式を描いた作品である。ナポレオンが皇后ジョゼフィーヌに対し、今まさに冠を授けようとする瞬間をとらえた。

ロマン主義の画家ドラクロア (Eugène Delacroix, 1798-1863) が描いた「民衆を導く自由の女神」(La Liberté guidant le peuple) は、1789年の革命ではなく、1830年の七月革命を描いた。自由の女神は左手に銃を持ち、右手に持った三色旗を高く掲げている。七月革命でシャルル10世 (Charles X. ルイ16世の末弟。ルイ18世の次に即位。在位1824-1830) は退位した。これでブルボン朝は断絶した。

新しく即位した王は、ブルボン家の分家にあたるオルレアン家の6代目、ルイ・フィリップ・ジョゼフ (Louis Philippe Joseph, Duc d'Orleans, 1773

－1850、国王としての在位1830－1848）だった。彼の父は、「フィリップ・エガリテ」（Philippe Égalité）こと、オルレアン家5代目のルイ・フィリップ（Louis Philippe, Duc d'Orleans, 1747－1793）だった。が、新王は反動化し、1848年に再び革命が起きて、フランス最後の国王となった。

かつて、フィリップ・エガリテ（「平等のフィリップ」の意）は進歩的な思想で知られ、1792年秋に開かれたルイ16世の裁判で死刑に賛成した。だが、自身も元国王の処刑から10ヶ月後の1793年11月に断頭台の露と消えた。

<関連サイト>

*The National Gallery (UK) “Jacques-Louis David”

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/jacques-louis-david>

*Web Museum, Paris “David, Jacques-Louis”

<http://www.ibiblio.org/wm/paint/auth/david/>

*Art Cyclopedia “Jacques-Louis David”

http://www.artcyclopedia.com/artists/david_jacques-louis.html

*The National Gallery (UK) “Eugène Delacroix”

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/eugene-delacroix>

*Eugene Delacroix The Complete Works

<http://www.eugenedelacroix.org/>

*Web Museum, Paris “Delacroix, Eugène W”

<http://www.ibiblio.org/wm/paint/auth/delacroix/>

*Art Cyclopedia “Eugène Delacroix”

http://www.artcyclopedia.com/artists/delacroix_eugene.html

*Musée national Eugène Delacroix (France)（ドラクロア美術館）

<http://www.musee-delacroix.fr/>

（４）サン・ジェルマン・ロークセロワ教会（Église St. Germain l'Auxerrois）

<http://www.saintgermainauxerrois.cef.fr/>

ルーヴル宮の東隣にある教会で、7世紀に建設された。1572年8月24日、

この教会の鐘を合図に「サン・バルテルミの虐殺」(La Saint-Barthélemy)が始まった。少し長くなるが、ここでフランスにおける新旧キリスト教の対立に触れたい。

ユグノー派 (huguenot。新教徒であるカルヴァン派の1つ) のアンリ・ド・ナヴァル (Henri de Navarre, 1553-1610。後のアンリ 4 世。ブルボン朝の開祖) とマルグリット王女 (Marguerite de Navarre, 1492-1549) の結婚式に参列するため、集まっていたユグノー派の貴族たちは惨殺され、その動きはたちまちフランス全土に広がった。背後には、1560年に10歳で即位した国王シャルル 9 世 (Charles IX, 1550-1574。在位1560-1574) の母で、摂政を務めていたカトリーヌ・ド・メディシス (Catherine de Médicis, 1519-1589) と、カトリックでフランスの名門貴族ギーズ公アンリ (Henri I de Guise, 1550-1588) がいたとされる。カトリーヌはフィレンツェで金融業を営んでいたメディチ (Medici) 家の出身で、アンリ 2 世の妻となった。

1574年、シャルル 9 世が20歳代半ばで死去すると、その弟がアンリ 3 世 (Henri III, 1551-1589。在位1574-1589) として即位した。だが、アンリ 3 世の弟が1584年に死去し、ブルボン家のアンリ・ド・ナヴァルが王位継承の候補者として浮上した。これを機にアンリ 3 世、ギーズ公アンリ、アンリ・ド・ナヴァルによる 3 アンリの争いが始まった。

アンリ 3 世はカトリック側と手を切り、1588年にギーズ公アンリを暗殺させたが、自身も1589年にカトリックの修道士に殺害された (バロア朝の断絶)。そこでブルボン家のアンリが王位継承を宣言したが、ローマ教皇とカトリック大国のスペイン (当時はハプスブルク家の系統) が異を唱えたため、アンリ 4 世は1593年にカルヴァン派からカトリックに改宗した。1598年、有名なナントの勅令 (Édit de Nantes) を発し、フランス国内におけるユグノー派の信仰を認めた。これにより、1562年にギーズ公がユグノーを襲撃して以来続いていたユグノー戦争ようやく終止符が打たれた。

アンリ 4 世 (Henri IV。在位1589-1610) はブルボン朝の開祖となり、国内の農業・工業を復興させ、フランス絶対王政の基礎を築いた。だが、スベ

インと神聖ローマ帝国に対し戦争を計画したため、再びカトリックの反感を買い、1610年にカトリックの修道士に暗殺された。こうして、3人のアンリは全員が暗殺という形で生涯を閉じた。検視した医者によれば、57歳のアンリ4世はまだ30年も生きられる健康な身体だったという（小島、p.65）。

アンリ4世の後継者は、2度目の妻マリー・ド・メディシス（Marie de Médicis, 1573–1642）との間に生まれたルイ13世（Louis XIII, 1601–1643。在位1610–1643）であった。1617年、ルイ13世は摂政を務める母から政治的実権を取り戻すと、1624年にリシュリユー（Armand Jean du Plessis, Duc de Richelieu, 1585–1642）を宰相に起用し、新旧両教徒の対立を押さえこみ、国王の絶対権力を強化した。そして、スペイン国王フェリペ3世の娘アンヌ・ド・ドリシュを娶り、後のルイ14世と初代オルレアン公フィリップをもうけた。

ちなみに、マリー・ド・メディシスはルイ13世に干渉しすぎ、母と息子の関係は悪化した。それだけ摂政の権力は大きかった。フランドル出身でバロック画家の巨匠だったルーベンス（Petrus Paulus Rubens, 1577–1640）に依頼した巨大な連作「マリー・ド・メディシスの生涯」がルーヴル美術館に所蔵されている。

時代は下がって、ルイ14世（Louis XIV, 1638–1715。在位1643–1715）の治世に再びユグノーの迫害が始まると、都市の商工業者に多かったユグノーたちはフランスから逃れていった。これがフランスの財政難を招き、革命の遠因の1つとなったといわれている。

<関連サイト>

*BBC (UK) “Test show head of France’s King Henri IV ‘genuine’ ”

<http://www.bbc.co.uk/news/science-environment-11996981>

*Château des Ducs Bretagne（ブルターニュ大公城）

<http://www.chateau-nantes.fr/>

ブルターニュ公フランソワ2世とその娘アンヌ・ド・ブルターニュが建設した城塞で、ナントの勅令が発布された場所。中にナント歴史

博物館 (Musée de l'histoire de Nantes) がある。

* Paroiss Saint-Pierre/Cathédrale St. Pierre de Genève (ジュネーヴのサン・ピエール寺院)

<http://www.saintpierre-geneve.ch/>

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-cathedral>

ジュネーヴ旧市街の中心部に立つ。もともとカトリックの教会だったが、宗教改革を強力に推し進めるカルヴァン (Jean Calvin, 1509-1564) がここで説教をしてから、プロテスタントの教会になった。内部にはカルヴァンが説教の際に座った椅子 (Chaise de Calvin) も展示されている。

* Auditoire de Calvin (カルヴァン講堂)

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-auditoire-calvin>

<http://sites.google.com/site/orguedeauditoirecalvin/>

教会の右隣に立つ建物で、ジョン・ノックス (John Knox, 1514?-1572) が説教した場所。ノックスは、イングランド女王メアリー1世 (Mary I, 1516-1558, 在位1553-1558) によるプロテスタントの弾圧の最中にジュネーヴに滞在し、カルヴァンと交流して、後にスコットランドの長老派 (Presbyterian) を設立した。

* Musée de la Reformation (宗教改革博物館)

<https://www.musee-reforme.ch/index-e.html> (フランス語版)

<https://www.musee-reforme.ch/english-version/> (英語版)

比較的小規模の博物館だが、宗教改革の時代の貴重な文物が多数展示されており、そのすばらしさに圧倒される。

* Quality Christian Tours to Europe—Geneva

<http://www.reformationtours.com/site/490868/page/661543>

* Monument de la Reformation/The Reformation Wall (宗教改革記念碑)

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-reformation->

wall

ジュネーヴの旧市街にあるバステイヨン公園 (Promenade des Bastions) に、カルヴァン派の宗教改革に貢献した4人、すなわちファレル、カルヴァン、ベーズ、ノックスの石像が立っている。1517年に宗教改革を始めたルターの像は、長方形のエリアのはるか左端に置かれている。

*Lutherstadt Wittenberg (ドイツ・ヴィッテンベルク)

<http://www.wittenberg.de/>

1517年にルターが宗教改革を始めたヴィッテンベルクの正式名称は「ルターの町ヴィッテンベルク」(Lutherstadt Wittenberg)である。ヴィッテンベルク大学で神学の教授だったルター (Martin Luther, 1483-1546) が「九十五カ条の論題」を貼りつけたのは、城教会 (Schloßkirche) の扉だった。

*Lutherhalle/The Luther House and Museum, Wittenberg (ルターの家と博物館)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-luther-house>

ヴィッテンベルクの市街地の入り口にあるルターの家は博物館となっており、内部を見学できる。

*Schlosskirche Lutherstadt Wittenberg/Castle Church (城教会)

<http://www.schlosskirche-wittenberg.de/> (ドイツ語版)

http://www.schlosskirche-wittenberg.de/index_eng.html (英語版)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-castle-church>

Schloß (Schlossとも表記) は「城」の意で、Kircheは教会である。ルターが「九十五カ条の論題」を貼りつけた木造の扉は、プロイセンとオーストリアが戦った七年戦争 (1756-1763) さなかの1760年に焼失し、1858年にブロンズ製の扉が付けられ、現在に至る。内部には、ルターとルターの同僚で宗教改革に少なからぬ影響を及ぼしたメランヒトン (Philipp Melanchton, 1497-1560) の墓が並ぶ。

*Stadtkirche/City Church of St.Mary, Wittenberg (ヴィッテンベルク市教会)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-city-church>

市教会 (Stadtkirche) はルターが説教をし、1525年に結婚した場所で、彼の6人の子もここで洗礼を受けた。建物はルターの時代のままではない。

*Lutherhaus/The Luther House (ルター・ハウス)

<http://www.lutherhaus-eisenach.de/> (ドイツ語版)

<http://www.lutherhaus-eisenach.de/english/index.htm> (英語版)

ドイツのアイゼナハ (Eisenach) にあるルターの家。学童だった1498年から1501年まで住んだ。

*Wartburg Castle, Eisenach, Germany (ヴァルトブルク城)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wartburg-castle>

ドイツのアイゼナハにある山城。ここでルターは新約聖書をドイツ語に訳し、ドイツ語の統一に貢献した。ホテルが併設されている。ルターが使っていた部屋の中には暖炉と机と椅子以外、当時の物は何もない。それは、昔から多くの人がここを訪れ、小物を「記念に」持ち帰ったからとか。壁には数百年前の落書きも残されている。

(5) バスティーユ広場 (Place de la Bastille)

バスティーユは普通名詞 (bastille) としては「牢獄」を意味するが、大文字で定冠詞を伴うと、政治犯を収容したバスティーユ監獄 (La Bastille) となる。ルイ14世によって建設され、圧政の象徴だったが、革命勃発の時点で囚人はわずか7名しかいなかったという (芝生, p.51)。

1789年7月14日の1年以上前から各地で貴族の館や工場を襲撃する事件が起きていた。バスティーユ襲撃 (pris de Bastille) の前日である13日には、テュイルリー宮殿が襲撃された。14日の朝9時頃、パリの西にあるアンヴァリッド (廃兵院。Invalides。後述) を襲って武器を入手した民衆は、パリの

東にあるバスティーユに向かい、午前10時半にはパリ選挙人（コミューン）の代表がバスティーユ前に到着した。代表たちは、要塞内で守備隊の司令官ド・ローネと交渉した（同上）。交渉は進まず、バスティーユ前にますます人が集まっていった（同上）。やがて何人かが城内に入り込み、門を内側から開けて、掘の橋を渡し、戦闘が始まった（同上）。

同日の午後遅く、アンヴァリッドやパリ市庁舎（後述）から大砲が到着し、城門に向けて発射された。守備隊は100数十名のスイス兵と廃兵のみで、死者1名、負傷者3名だった（同上）。殺されたド・ローネ司令官の首を槍の穂先に突き刺さして、パリ市民は行進した。曖昧な立場を取ったパリ市長のフレッセルは射殺され、その首もまた槍の穂先に突き刺された（同上）。

この後、選挙人の自治体（コミューン）がパリ市の実権を掌握し、新しいパリ市長が就任した。また、アメリカ独立革命に参加したラファイエット侯爵（1757－1834）が新設された国民衛兵の司令官となった。彼は市民軍の赤、青、ブルボン朝の象徴の白色を加えた三色の帽章（コカルド）を国民衛兵のシンボルにしたという。カトリックのブルボン家の紋章は白百合の花だった（フランス国旗の由来の詳細は、辻原，pp.51－52を参照）。

1789年8月26日、三部会改め立法議会は「人および市民の権利宣言」（*Déclaration des droits de l'homme et du citoyen*）、すなわちフランス人権宣言を採択した。第1条は「人は、自由かつ権利において平等なものとして出生し、かつ生存する。社会的差別は、共同の利益の上にのみ設けることができる」と規定する（訳文の出典は高木八尺ら編『人権宣言集』岩波書店、2007年，p.131）。これは、1776年7月4日に採択されたアメリカ独立宣言に倣ったもので、立法議会が8月17日から議論していた。ただし、どちらの宣言も全ての人間を「人」に含めていなかったのは周知のとおりである。

今日バスティーユ広場の中央に立つ記念柱は、1830年の七月革命の犠牲者を偲んで建てられた。地下の納骨所には革命の犠牲者が眠る。広場の一角に、フランス革命200周年を記念してオペラ・バスティーユ（Opéra Bastille）が建てられたが、ガラス張りの近代的なデザインがまばゆい。現在、大半のオ

ペラはこちらで上演される。一方、ミュージカル「オペラ座の怪人」の舞台としても知られるオペラ・ガルニエ (Opéra Garnier) は、ナポレオン 3 世の治世下で完成したが、ここではバロック・オペラやモーツァルト作品が上演される。内部の見学ツアー (有料) もある。

<関連サイト>

* Discover France “Place de la Bastille”

<http://www.discoverfrance.net/France/Paris/Monuments-Paris/Bastille.shtml>

* A View on Cities “Place de la Bastille”

<http://www.aviewoncities.com/paris/placedelabastille.htm>

* Opéra national de Paris (パリ国立オペラ)

<http://www.operadeparis.fr/>

(6) コンコルド広場 (Place de la Concorde)

ルイ15世の時代に起工され、1755年から20年の歳月かけて建設された。当初はルイ15世の騎馬像を置くために造られ、「ルイ15世広場」と呼ばれたが、1790年に「大革命広場」と改称された。1792年、ルイ15世像は撤去され、断頭台が置かれて、革命広場に改称された。

1793年から1795年まで、この広場に置かれた断頭台で計1343人が処刑された。国王廃位後ルイ・カペーとよばれたルイ16世は、1793年1月21日にここで処刑された。夫の処刑後、カペー未亡人とよばれたマリー・アントワネットは、同年10月16日にこの広場で処刑された。

断頭台は王族や貴族以外の人々の血も次々と吸った。ジャコバン・クラブ (Club des Jacobins) の一員だったダントン (Georges Jacques Danton, 1759-1794) は独裁者となったロベスピエール (Maximilien de Robespierre, 1758-1794) と対立し、1794年4月5日に処刑された。処刑直前、「ロベスピエールよ、おまえもすぐ後続く」とつぶやいたといわれる (芝生, p.127)。3ヶ月半後に起きたテルミドール (熱月) 反動で、ロベスピエールとその一味は

逮捕・処刑された。

広場の名称は何度か変わり、1830年に「コンコルド広場」となった（コンコルドは「調和」の意）。広場中央にあるオベリスク（l'Obélisque de la place de la Concorde）はエジプトのルクソール（Luxor）神殿から持ち帰ったもので、1836年に建てられた。

<関連サイト>

* Discover France “Place de Concorde: Obélisque de Luxor”

<http://www.discoverfrance.net/France/Paris/Monuments-Paris/Obelisque.shtml>

* A View on Cities “Place de la Concorde”

<http://www.aviewoncities.com/paris/placedelaconcorde.htm>

* The Paris Pages “Place de Concorde; Obélisque de Luxor”

<http://www.paris.org/Monuments/Concorde/>

（7）テュイルリー庭園（Le Jardin des Tuileries）

フィレンツェのメディチ家からアンリ 2 世に嫁いだカトリヌ・ド・メディシスが、テュイルリー宮殿（Palais des Tuileries）とイタリア式庭園を建設させた。1556年に起工されたが、ユグノー戦争などで工事が何度も中断された。ブルボン朝の開祖アンリ 4 世が宮殿建設を引き継ぎ、孫のルイ 14 世が建設を再開した。1682年、ルイ 14 世は宮廷をルーヴル宮からパリ郊外のヴェルサイユ宮殿へ移転した。

1789年10月 5 日、ヴェルサイユ行進によってパリ市民が国王一家をヴェルサイユからパリに連れ戻した。財政難のため、以前からテュイルリー宮殿の皇太子の居間はアパートマンとして市民に賃貸されていたが、当時の宮殿は荒れ果てていたという。

1871年のパリ・コミュンでテュイルリー宮殿は焼失し、現在は庭園となっている。庭園の西の端は、かつて断頭台が置かれたコンコルド広場につながっている。

<関連サイト>

*Mairie 1e “Le Jardin des Tuileries”

http://www.mairie1.paris.fr/mairie01/jsp/site/Portal.jsp?page_id=255

パリ第1区役所がテュイルリー庭園を紹介したページ。

*A View on Cities “Le Jardin des Tuileries”

<http://www.aviewoncities.com/paris/tuileries.htm>

(8) タンプル公園 (Square du Temple)

国王ルイ16世一家は、王妃と恋愛関係にあったとされるスウェーデン伯爵フェルセンの手引きで、国外逃亡を図った。だが、パリ市外に出るまで馬車の手綱を取ったフェルセンが不慣れで道に迷う、パリ郊外のボンディの森で人目を引く豪華な馬車に乗り換える、休憩を取りながらのんびり進むなど、不手際が重なった。遅れた国王一家は軍との待ち合わせに失敗し、ヴァレンヌ村 (Varenne) で捕らえられ、テュイルリー宮殿に連れ戻された。

1792年にフランスとオーストリアが戦争を始めると、状況はさらに悪化した。7月11日、立法議会が「祖国の危機」を宣言し、国民衛兵の武装と義勇兵の募集が始まった。7月25日、オーストリアのブラウンシュヴァイク公が、フランス王室に危害を加えればパリ市を破壊すると宣言したが、かえってフランス国民の怒りを爆発させた (ルヴェ, p.96)。王権停止を求める請求書が立法議会に出されたが、回答期限の8月9日を過ぎても回答はなかった。

ついに、8月10日、怒った民衆や兵士がテュイルリー宮殿を襲撃し、宮殿を守っていたスイス衛兵との間に激しい戦闘が行われた。ルイ16世は家族を連れてやむなく立法議会に保護を求めた。民衆が議場になだれ込み、一家は書記用の小部屋に避難した。翌11日、立法議会は王の職務停止を宣言し、13日に国王一家はタンプル塔に収容された。

タンプル塔 (Tour du Temple) は、もともとテンブル騎士団 (chevalerie du Temple/ordre du Temple) の本拠地で、5階建ての城砦に円錐形の屋根の付いた2つの塔があった。国王一家を収容するにあたり、周囲にあった樹木

や家屋が撤去され、逃亡防止のため窓に鉄格子や目隠しの日よけが取り付けられたという（ルヴェ、p.99）。ここでルイ16世は息子に勉強を教え、アントワネットとエリザベートはマリー・テレーズ・シャルロットに絵を描き、音楽を教え、時折庭を散策した（同上、p.101）。しかし、1792年8月13日に国王一家が初めてタンプル塔で食事をした時の様子を描いた絵を見ると、見張りたちが一家をにらみつける目は異様に鋭い（同上）。決して、家族だけでくつろげる時間はなかっただろう。

やがて、テュイルリー宮殿のルイ16世の住居から、王が作った秘密の引出し「鉄の戸棚」が発見された。戸棚に残されていた文書から、王が亡命者と連絡を取り、外国と交渉していたことが明らかになった（同上、p.103）。

1792年12月11日、パリ市長がタンプル塔を突然訪れ、ルイ16世は裁判所へ連れて行かれた。被告となった元国王は、クリスマスや新年にも家族に会えなかった。ようやく再会できたのは、死刑が確定し処刑前日となった1793年1月20日の夜だった。夫の口から死刑判決を聞かされたマリー・アントワネットは夫にすがりつき、家族全員がすすり泣いた（同上、p.106）。翌朝、ルイ16世は妻に最後の別れを告げるつもりだったが、付添いの司祭の勧めにより、妻には会わずに刑場へ向かい、自身の髪の毛と結婚指輪を司祭に託した（同上、p.103）。

1793年1月21日午前10時22分、太鼓の連打と大砲の音で夫の処刑を知ったマリー・アントワネットは、息子ルイ・シャルルの前に跪き、新王ルイ17世の誕生を称えた（同上、p.106）。ルイ17世は実際に即位していないが、1814年にブルボン朝が復活したとき、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世（Louis XVIII、1755－1824。在位1814－1824）として即位した。

タンプル塔は、皇帝ナポレオンの命により1811年までに取り壊された。現在、タンプル公園（3区）となっている。公園は、一般的な旅行ガイドブックの地図に載っているが、索引には載っていないので、ここで正確な行き方を記載したい。レピュブリック広場（Place de la République）から200mほど南西に行った場所で、東側に第3区役所（Marie du3^e）があり、南側に

Rue de Bretagneがある。地下鉄（métro）の最寄り駅は、13号線のTempleになる。

<関連サイト>

* Mairie du3e（パリ第3区役所）

<http://www.mairie3.paris.fr/mairie03/jsp/site/Portal.jsp>

* Mairie du3e “Square du Temple”

http://www.mairie3.paris.fr/mairie03/jsp/site/Portal.jsp?document_id=11634&portlet_id=969

* Paris-Walking-Tours. com “Square du Temple”

<http://www.paris-walking-tours.com/squaredutemple.html>

* Le Square du Temple—accueil Paris

http://paris1900.lartnouveau.com/paris03/squares/le_square_du%20temple.htm

（9）裁判所（Palais de Justice）

パリのシテ島（Île de la Cité）の西側にある。古くはノルマン人の侵攻を防ぐ要塞で、中世にはカペー王朝の住居となった。14世紀初め、コンシェルジェリー（後述）が造営され、高等法院が設置された。1789年5月、ここで三部会の開催が要求され、後に革命裁判所が置かれた。

有名な首飾り事件はパリの高等法院で裁かれた。ルイ15世の愛人デュ・バリー夫人のために、高価なダイヤモンドの首飾りが作られた。これは、平たいリボンのような形をしていた（ルヴェ、pp.68－69にデザイン画が載録されている）。ルイ15世の急逝で首飾りを売却できなくなった宝石商のベメールは、王妃マリー・アントワネットに売却を試みたが、150万リーブルという価格を聞き、王妃もさすがに購入しなかった。

そこに、王妃の友人をかたるラ・モット夫人が現れ、王妃の不興を買っていたロアン枢機卿に王妃への取りなしを申し出た。枢機卿は女好きで、王妃に嫌われていた。王妃が首飾りの代金の分割払いを枢機卿に保証してほしい

と言っている、とラ・モット夫人はロアン枢機卿を騙した。宝石商は王妃に第1回の支払いを求める手紙を送ったが、思慮の足りない王妃は、何のことかわからないと手紙を焼き捨ててしまった。詐取された首飾りはロンドンで分解され、ダイヤモンドは売却された。

事件が発覚すると、ロアン枢機卿は弁償を申し出たが、怒った王妃は枢機卿の逮捕を求めた。多くのフランス国民は、「赤字夫人」(Madame Déficit。王妃のこと)が枢機卿を利用したと考えた。

1786年5月31日、パリ高等法院で判決が出されたが、ラ・モット夫人の一味は有罪になったが、ロアン枢機卿は無罪となった。王妃は衝撃を受け、フランス国民は喜んだという。だが、国王はロアンを引退させた。高等法院の判決を無視したことで、貴族の反発を買った。その後、主犯のラ・モット夫人は裁判所の庭で民衆が見守る中、鞭打ちと「V」の字(voleurの略。「泥棒」の意)の焼きごてを当てられる刑を受けた。終身刑としてバステューユに収監されたが脱獄し、ロンドンへ逃亡した。

<関連サイト>

* Paris France.ca “Palais de Justice” (裁判所)

<http://parisfrance.ca/attractions/palaisdejustice.html>

* 首都官邸「フランス共和国の司法制度」

<http://www.kantei.go.jp/jp/sihouseido/pdfs/dai5gijiroku-2.pdf>

* Musée de la Prefecture de Police (警視庁博物館)

<http://www.prefecturedepolice.interieur.gouv.fr/La-prefecture-de-police/Service-de-la-memoire-et-des-affaires-culturelles/Le-musee-de-la-prefecture-de-police>

パリ警視庁はシテ島にあるが、警視庁博物館は川を南下してサン・ニコラ・ド・シャルドネ教会 (Église St. Nicolas du Chardonnet) の比較的そばにある。

(10) コンシェルジェリー (Conciergerie)

<http://www.conciergerie.monuments-nationaux.fr/>

コンシェルジェリーは、裁判所やノートル・ダム大聖堂（後述）と同じくパリのシテ島にある。フランス語で小文字のconciergerieは管理人室や門衛所を示すが、大文字で定冠詞が付いた場合（La Conciergerie）、フランス革命時のパリ裁判所付属牢獄を指す。

コンシェルジェリーはゴシック様式の建物で、元は王室の管理府だったが、14世紀頃から裁判所付属の牢獄となった。革命中、ここに収容された者の7割が断頭台の露と消えたという。コンシェルジェリーは重大犯罪を行った者が収容される場所だった。

タンプル塔に閉じこめられたルイ16世一家は、外国との取引材料として手厚く保護されていたが、国王一家を逃亡させようとする計画が何度も発覚した。また、ルイ16世の処刑後、次男のルイ・シャルルをルイ17世として即位させようという計画があるとの噂が流れていた。

元国王の処刑から半年後の1793年7月3日午後10時、アントワネットの部屋に役人たちが突如入ってきた（ルヴェ, p.107）。彼らは命令書を読み上げ、次男ルイ・シャルルを家族から引き離した。幼い元王太子は山岳派のパン屋に預けられた。それから約1ヶ月後の8月2日午前2時、マリー・アントワネットはコンシェルジェリーへ連行された（同上）。タンプル塔には、長女マリー・テレーズ・シャルロットと義妹エリザベートが残された。

コンシェルジェリー内部には、王妃が処刑までの76日間を過ごした独房や「衛兵の間」が再現されている。見張りの衛兵が常に部屋の中にいた。くわえて、守衛に金を払えば誰でも囚人を見物できたので、王妃の見知らぬ面会客が大勢訪れたという（ルヴェ, pp.107-108）。

1793年10月5日、マリー・アントワネットは起訴された。10月12日、「敵との共謀」「国家の安全に対する陰謀」などの罪状を持つ「諸悪の根源であるオーストリア女」は出廷した。夫の処刑後、マリー・アントワネットはすっかり老け込んでいた。王族の常で、恋愛を経て結ばれたわけではなかったが、革命勃発後は夫と支え合ってきた。かつての王妃の姿を知っている人々は、憔

悴しきった被告を見て驚いたという（同上，p.108）。だが，元王妃は息子との近親姦の罪を挙げられた時，毅然と反論した。裁判所内で傍聴していた庶民の女たちでさえ，被告に同情したという（同上，p.109）。

10月15日，元王妃への裁判は結審した。陪審員たちは1時間討議したふりをして，元王妃に死刑が言い渡された（同上，p.114）。むろん，最初から死刑以外ありえなかったのである。

(11) パリ市庁舎 (Hôtel de Ville)

*** Ville de Paris** (パリ市役所)

<http://www.paris.fr/>

1357年にシャトレ広場から現在の場所に移転した。1871年のパリ・コミューンで焼失したが，1882年に元通りに再建された。宮殿のように壮観な建築である。パリに限らず，ヨーロッパの市庁舎は歴史的建造物が多い。市庁舎の大時計の下には，フランス共和国の標語として有名な「自由・平等・博愛」(Liberté, Égalité, Fraternité) の文字が刻まれている。

<関連サイト>

*** Ville de Paris “Hôtel de Ville Virtual Tour”**

http://www.paris.fr/portail/english/Portal.lut?page_id=8207&document_type_id=5&document_id=34169&portlet_id=18967

*** A View on Cities “Hotel de Ville”**

<http://www.aviewoncities.com/paris/hoteldeville.htm>

(12) フランス歴史博物館 (Musée de l’Histoire de France, Hôtel de Soubise)

<http://www.culture.gouv.fr/mcc/Actualites/A-la-une/La-Maison-de-l-histoire-de-France-s-installera-aux-Archives-Nationales>

もとは18世紀に建てられた貴族の館で，ナポレオンの遺言書，フランス人権宣言，ジャンヌ・ダルクの書簡などが所蔵されている。博物館の隣にはロアン館 (Hôtel de Rohan) があるが，ここを歴代のロアン大司教がパリの館

として使っていた。

(13) カルナヴァレ博物館 (Musée Carnavalet)

http://www.paris.fr/portail/loisirs/Portal.lut?page_id=6468 (フランス語版)

http://www.paris.fr/portail/english/Portal.lut?page_id=8118 (英語版)
フランス革命関係の資料が充実している。マリー・アントワネットの遺品も所蔵する。

(14) 国立古文書館 (Le Archive nationale)

<http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/>

フランス歴史博物館の比較的近隣にあり、フランス革命に関する史料を多数所蔵する。マリー・アントワネットは処刑の朝、義妹エリザベートに宛てて最後の手紙を書いた。手紙は、後にジャコバン・クラブの独裁者となるロベスピエールの手に渡り、1816年までその存在を知られていなかった。オリジナルは国立古文書館で保存されているが、レプリカが展示されている(手紙の和訳はブラン、pp.215-220に載録)。

(15) ダヴィッドによる処刑直前のマリー・アントワネットのスケッチ

*Smithsonian.com “Marie Antoinette”

<http://www.smithsonianmag.com/multimedia/photos/?c=y&articleID=10022971&page=6>

1793年10月15日、死刑判決を受けたマリー・アントワネットは、独房へ戻ると義妹エリザベートに最後の手紙を書いた。便箋の冒頭には「10月16日午前4時30分」という日時が記されている。残される2人の子どもたちを託した手紙の便箋は、びっしりと細かい字で埋め尽くされ、母の必死の思いが伝わってくる。

処刑の朝、元王妃は喪服を着ることを許されず、白い部屋着姿で荷馬車に

乗せられた。パリ市内をゆっくり進むマリー・アントワネットの様子を、後にナポレオンの画家となるダヴィッドがラフなスケッチに残した。荷台の元王妃は後ろ手に縛られ、白髪を襟元でばっさりと短く切られ、口元はへの字に結ばれている。王妃の肖像画家で、親しい友人でもあったヴィジェ・ル・ブラン夫人 (Marie Elisabeth Louise Vigée Le Brun, 1755-1842) が描いた絵と比べると、何という変わりようであろうか。

しかし、死刑囚の背筋はびんと伸びていた。詰めかけた群衆が怒号を浴びせかける中でも、フランス王妃として、マリア・テレジアの娘として、最後の威厳を示そうとしたのだろう。

元王妃の奪還計画を阻止するため、パリ市内は厳重に警備された。午後12時15分、元王妃は革命広場の断頭台で処刑された。

<関連サイト>

***PBS (USA) “Marie Antoinette and the French Revolution”**

<http://www.pbs.org/marieantoinette/timeline/index.html>

アメリカの放送局PBS (Public Broadcasting Service)のサイトだが、フランス革命のできごとが年表形式にまとまっている。また、関連する絵画などが充実している。PBSは中立かつ客観的な報道で知られ、PBSの系列局の1つ、WGBH/Boston (<http://www.wgbh.org/>)は数々の良質なドキュメンタリー番組を制作してきた。

***Smithsonian.com (USA) “Biography Marie Antoinette”**

<http://www.smithsonianmag.com/history-archaeology/biography/marieantoinette.html>

マリー・アントワネットの生涯をまとめた。5ページにわたる詳細な説明が書かれている。前述のスケッチは、このページに付けられた写真の最後にある。Marie Antoinette, Photo Gallery, Smithsonian.comでも検索できる。

***The National Gallery (UK) “Elisabeth Louise Vigée Le Brun”**

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/elizabeth-louise-vigee-le-brun>

ロンドンのナショナル・ギャラリーによるル・ブラン夫人の解説。

*The National Gallery (UK) “Self Portrait in a Straw Hat” Elisabeth Louise Vigée Le Brun

<http://www.nationalgallery.org.uk/paintings/elizabeth-louise-vigee-le-brun-self-portrait-in-a-straw-hat>

ル・ブラン夫人の麦藁帽子をかぶった自画像。1782年以降に制作された。

*Marie Louise Élisabeth Vigée Lebrun

http://www.artcyclopedia.com/artists/vigee-lebrun_marie_louise_elisabeth.html

(16) サン・ドニ大聖堂 (Basilique cathédrale de Saint-Denis)

<http://saint-denis.monuments-nationaux.fr/>

サン・ドニ大聖堂の地下には、ブルボン家および歴代国王の墓所がある（有料）。革命勃発直前の1789年6月、国王夫妻の長男ルイ・ジョゼフは病没した。幼い王太子の墓標の隣に、次男ルイ・シャルル（後のルイ17世。実際には即位していない）の墓標がある。

4歳のルイ・シャルルは兄の死により王太子となったが、これは過酷な運命の始まりだった。1793年1月に父ルイ16世が処刑され、同年7月に母から引き離されると、ルイ・シャルルは山岳派の靴屋シモンに預けられ、徹底的に思想教育をされたという。元王妃の裁判では、母と性的関係を持たされたという調書に署名させられた（ルヴェ, pp.108-109, 145-146を参照）。姉や叔母に会うこともなく、劣悪な環境にたった1人で置かれた王太子は10歳で亡くなったが、その心臓は1975年に取り出され、ガラスの小瓶に保存された（以下のルイ17世のサイトを参照）。国王の心臓を保存する習慣に基づいてだが、ひからびた小さい心臓は見るのも痛々しい。

ルイ16世一家で唯一生き延びたのは、国王夫妻の長女マリー・テレーズ・シャルロット（1778-1851）だった。「マリー・テレーズ」は、母方の祖母で

オーストリアの女帝マリア・テレジア (Maria Theresia, 1717-1780) の名をフランス語読みにしたものである。結婚から7年経ってようやく「不完全な結婚」を脱し、結婚8年目に初めて母となったフランス王妃の喜びが伝わってくるようである。

タンブル塔における王女 (Madame Royale) の生活は悲惨だった。1794年5月、長年行動を共にしてきた叔母のエリザベートが処刑され、翌年6月、1人で牢獄に入れられていた弟が10歳で死んだ。1795年、17歳になっていた王女は人質交換のため母の実家ウィーンへ送られた。1799年、父の次弟アルトワ伯の息子でアングレーム公爵のルイ (Louis Antoine de Bourbon, 1775-1844) と結婚し、アングレーム公爵夫人 (duchess d'Angoulême) となった。1824年に義父がシャルル10世として即位すると、夫が王太子 (dauphin) となり、王女は王太子妃 (dauphine) となった。長命なマリー・テレーズ・シャルロットは、義父が王位を追われた1830年の七月革命も、フランス王制が完全に終焉した1848年の二月革命も、自分の目で見た。そして、1851年にその長く数奇な人生を終えた。

<関連サイト>

(以下はヴェルサイユ宮殿の公式ホームページ)

*** Louis XVII (ルイ17世)**

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/the-dauphin-louis-xvii->

*** Madame Royale (マリー・テレーズ・シャルロット)**

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/madame-royale>

(17) マドレーヌ教会 (Église Ste-Marie Madeleine)

<http://www.eglise-lamadeleine.com/>

マドレーヌ教会はコリント様式の柱が支える建物で、ギリシャ神殿のような概観だが、教会である。1849年にピアニストで作曲家のショパンの葬儀が

執り行われた場所としても知られる。パリ市民に親しまれており、La Madeleineで通じる。

1793年1月の処刑後、ルイ16世の遺体はマドレーヌ教会から北に300mほど行ったマドレーヌ墓地（Cimetière de Madeleine）に埋葬された。

同年10月に処刑された元王妃マリー・アントワネットの遺体もマドレーヌ墓地に運び込まれた。だが、役人たちは遺体を草むらに放置して昼休みをとり、遺体の両足の間に頭部が置かれたまま1日以上経過したという（ルヴェ、p.115）。

1814年にナポレオンが皇帝を退位してエルバ（Elba）島へ配流され、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世として即位した。新国王が兄夫婦の遺体をブルボン家の墓所であるサン・ドニ大聖堂へ改葬したのは、革命勃発から四半世紀以上経った1815年1月21日だった。墓地の跡地には、ルイ16世の末弟アルトワ伯（後のシャルル10世）が贖罪礼拝堂（Chapelle Expiatoire）を建てた。

<関連サイト>

*Les Amis de la Madeleine（マドレーヌ友の会）

<http://www.lesamisdelamadeleine.com/>

(18) ノートル・ダム大聖堂（Cathédrale Notre-Dame de Paris）

<http://www.cathedrale-paris.net/>

セーヌ河畔のシテ島に立つ。「ノートル・ダム」（我々の貴婦人。英語でOur Lady）は聖母マリアを意味するが、この名称の教会はフランス各地にある。最も有名なノートル・ダム、というより、日本人にとってのノートル・ダムは、パリのシテ島にあるものだろう。

大聖堂は1163年に起工され1245年頃に完成した、ゴシック建築の代表作である。1804年、ナポレオンの戴冠式がここで行われた。それ以前には、ジャンヌ・ダルクの名誉回復裁判や、1572年にアンリ・ド・ナヴァル（後のアンリ4世。ブルボン家の開祖）と国王シャルル9世の妹マルグリット王女の結

婚式が行われた。

(19) ランスのノートル・ダム大聖堂 (Cathédrale Notre-Dame de Reims)

<http://www.cathedrale-reims.com/notre-dame-saint-jacques-reims/>

ランス (Reims) はシャンパンで有名なシャンパーニュ (Champagne) 地方の中心都市で、パリ東駅 (Gare de l'Est) から電車で1時間半ほどの距離にある。大聖堂は401年に建設されたが、現在の建物は13世紀から14世紀にかけて再建されたものである。ゴシック様式の傑作とされ、歴代フランス王はここで戴冠してきた。第1次世界大戦で建物の大半が破壊されたが、20年間をかけて再建された。

1774年5月にルイ15世が天然痘で急逝すると、18歳の王太子ルイ・オーギュストがルイ16世として即位した。翌1775年6月11日、聖成式 (即位の後、国王がランスで宗教的祝聖を受ける式典) が執り行われた。

式典から戻った新国王は、パリ市内のルイ・ル・グラン学院 (現在のLycée Louis le Grand) に寄った。皮肉なことに、教授の執筆した韻文を読み上げた学生は、給費生として学んでいたロベスピエールその人であった (ブローワゾ, p.13)。1780年7月31日に法学士の学位を得たロベスピエールは翌年に弁護士となり、故郷のアラス (Arras) に戻って、小さな事件の弁護士をしながら貧しい人々のために活動した (トレモリエール, リシ, p.15)。

現在、学院はソルボンヌ大学 (パリ第3・4大学) の東隣にある。学院の名の由来は、太陽王 (Roi Soleil) ことルイ14世 (Louis le Grand。英語で Louis the Great) である。

<関連サイト>

*Lycée Louis le Grand (ルイ・ル・グラン学院)

<http://www.louis-le-grand.org/albedo/index.php>

(20) アンヴァリッド (廃兵院) (Hôtel des Invalides)

<http://www.invalides.org/>

ルイ14世の命により、17世紀後半に傷病兵の療養所としてパリ市内に建設された。セヌ河畔に立ち、ドーム教会 (Église du Dôme) と呼ばれる巨大な丸天井の教会がパリ観光の便利な目印となっている。1789年7月14日の朝、パリ市民はここの武器庫から2万8千丁の小銃を略奪すると、その足でバスティーユを襲撃した。

一方、アンヴァリッドはナポレオンの墓所でもある。1821年5月5日、51歳のナポレオンは流刑地の英領セントヘレナ (St. Helena) 島で生涯を閉じた。死因は胃癌だったという (レンツ, p.129)。フランス国王ルイ・フィリップの要請により、1840年12月15日、セントヘレナ島から運ばれたナポレオンの柩が3ヶ月間、アンヴァリッドのドーム下に安置された。1861年4月3日、ナポレオン3世 (ナポレオンの弟ルイと、皇后ジョゼフィーヌの連れ子オルスタンスの間に生まれた子) は、伯父である初代皇帝ナポレオン1世の遺骸を移転する式典を挙行了した。柩は教会の地下納骨堂に収められた。

ここには、ナポレオンが2番目の妻マリー・ルイーゼとの間にもうけたローマ王 (後のライヒシュタット公) の墓も並ぶ。第2次世界大戦中、シェーンブルン宮殿内のハプスブルク家墓所からアンヴァリッドに移された。オーストリアは1938年にドイツに併合され、フランスにはドイツの傀儡ヴィシー政府があった。

敷地内にある軍事博物館 (Musée de l'Armée) には、歴代フランス王が用いた武具・甲冑等の膨大なコレクション、ナポレオンの遺品、要塞の模型・図面等が展示されている。

<関連サイト>

*Tuscany.org “Elba” (エルバ島観光案内のサイト紹介)

<http://www.tuscany.org/Geographical-Areas/Elba-Island/>

*St. Helena Tourism Official Website (セントヘレナ島観光案内)

<http://www.sthelenatourism.com/>

(21) 陸軍士官学校 (École Militaire)

ルイ15世の命により建設され、1772年に完成した王立学校で、士官養成を目的とする。コルシカ島出身のナポレオン・ボナパルトは15歳で入学し、1784－1785年にここで学んだ。砲兵少尉として卒業したが、成績は決してよくなかった。小柄で平凡な評価の男が、20年後にフランス初の皇帝になると誰が予想したであろうか。

<関連サイト>

* Collège interarmées de défense (フランス国防省軍事大学校)

<http://www.college.interarmees.defense.gouv.fr/>

* Napoleon.Org “École Militaire-Champs de Mars Military School”

http://www.napoleon.org/en/magazine/museums/files/Ecole_Militaire-Champs-de-Mars_Military_School.asp

* A View on Cities “Champs de Mars” (練兵場)

<http://www.aviewoncities.com/paris/champdemars.htm>

(22) エトワール凱旋門 (Arc de Triomphe)

<http://en.parisinfo.com/museum-monuments/3/arc-de-triomphe-centre-des-monuments-nationaux>

ナポレオン1世の命により建設された。「凱旋門」ときけば、このエトワール凱旋門を思い浮かべる人が多いであろう。凱旋門はフランス軍の栄光を称えるための建物で、ここを中心にシャンゼリゼ通りを含む主要幹線道路が放射線状に出ている。ただし、ナポレオンが生きている間に完成しなかった。

1920年、第1次世界大戦で戦死した1人の無名戦士の墓が凱旋門の下に設けられた。1922年以来、毎夕6時半に慰霊の火が燃やされ、式典が行われる。第2次世界大戦の間も、この式典が途絶えることはなかった。

(23) カルーゼル凱旋門 (Arc de Triomphe du Carrousel)

1805年、フランスの数々の戦勝を記念して起工され、ルーヴル宮の西側にある内庭に、約3年間かけて建てられた凱旋門である。白と赤の大理石を使

っているので、全体がバラ色に見える。8本の大理石の柱に支えられるが、高さは15メートル弱とあまり高くないため、威圧感はエトワール凱旋門ほどない。レリーフのモチーフには、1805年のアウステルリッツの戦いやウルムの戦いにおける勝利が選ばれた。

ただし、ナポレオンはカルーゼル凱旋門が小さいと気に入らず、新たな凱旋門を建設させた。これが前述のエトワール凱旋門である。

<関連サイト>

*** Paris Pages “Arc de Triomphe du Carrousel”**

<http://www.paris.org/Monuments/Carrousel/>

*** Napoleon.Org “Arc de Triomphe du Carrousel—Paris”**

http://www.napoleon.org/fr/magazine/musee/files/Arc_Triomphe_Carrousel.asp

(24) エリゼ宮 (Palais de l'Élysée)

<http://www.elysee.fr/president/accueil.1.html>

エリゼ宮は1718年に伯爵の宮殿として建てられた。ルイ15世の寵姫ポンパドゥール夫人や、ナポレオンの最初の妻ジョゼフィーヌ皇后もここに住んだ。1815年に、ワーテルローの戦いに敗れたナポレオンは、ここで2度目の退位書に署名した。1873年から大統領官邸として使われているが、アメリカのホワイトハウスと異なり、内部は見学できない。

エリゼ (Élysée) はギリシャ神話のエリュシオン、すなわち死後の楽園、理想郷を意味する。シャンゼリゼ大通り (Les Champs Élysées) のÉlyséesも同じ語句である。英語ではElysiumとなる。

<関連サイト>

*** Palais de l'Élysée et son histoire**

<http://www.elysee.fr/president/la-presidence/l-elysee/histoire-du-palais/le-palais-de-l-elysee-et-son-histoire.6172.html>

フランス大統領府ホームページにあるエリゼ宮の歴史。

***The White House Virtual Tour**

<http://www.visitingdc.com/white-house/virtual-tour-white-house.htm>

アメリカのホワイトハウスのヴァーチャル・ツアー。

2. ベルギー

(1) ワーテルロー古戦場

1815年3月1日、ナポレオンはエルバ島を脱出し、フランス東南部に上陸した。民衆は歓呼の声で迎え、無抵抗で3月20日にテュイルリー宮殿に入城した。ウィーン会議の参加国は、ナポレオンを倒すべく大同盟を結成した。

3ヶ月後の6月16日、ナポレオンはベルギー中部の町レニーでプロイセン軍に勝利した。だが2日後の18日、ブリュッセルの南にある小村ワーテルロー（Waterloo）で連合軍と対決した際は敗北した。6月22日、ナポレオンは2度目の退位書に署名し、彼の「百日天下」（Les Cent Jours）は終わった。7月14日、ナポレオンはイギリスに亡命を求めたが、イギリスは長年に渡るヨーロッパの混乱の責任をとらせようと、大西洋の孤島、英領セントヘレナへの流刑に処した（レンツ、pp.125, 128）。

当時のブリュッセルはオランダの一部で、ベルギー独立はワーテルローの戦いから15年後の1830年であった。現在、ベルギーの主要言語はオランダ語（住民の母語はオランダ語に近いフラマン語）、フランス語、ドイツ語の3つである。北のフランドル地方ではオランダ語が、南のワロン地方ではフランス語が使われる。一方、首都ブリュッセルは完全な2カ国語圏で、通りの名前、駅の案内など、全てがオランダ語とフランス語で表示されている。

現在、ワーテルローの古戦場は大半が野菜畑になっている。古戦場をカートで巡るツアー（有料）は、ライオンの丘の麓にあるビジター・センター（Centre du Visiteur）で購入できる。センターでは、他の施設への共通入場券も販売している。

<関連サイト>

***Maison du Tourism de Waterloo**（ワーテルロー観光案内所）

<http://www.waterloo-tourisme.be/>

(2) ライオンの丘 (Champ de Bataille de Waterloo—Hameau du Lion)

<http://www.waterloo1815.be/fr/waterloo/> (フランス語版)

<http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/> (英語版)

<http://www.waterloo1815.be/fl/waterloo/> (フラマン語版)

フランス軍の大砲を溶かして造ったライオン像が、1826年にオランダの築いた「ライオンの丘」(La Butte du Lion/Lion Mound)の上にそびえ立つ。頂上から、ヨーロッパの命運を決した古戦場を一望することができる。毎年7-8月の週末には、大砲の発射、軍隊の行進、戦闘の再現など、歴史を体感できるイベントが行われる。

丘のすぐ側には、ワータルローの戦いを大音響と360度のパノラマで再現したワータルローの戦いパノラマ館 (Panorama de la Bataille de Waterloo), ワータルローの戦いに参加した主要人物などの蠟人形がある蠟人形館 (Le Musée de cire) などがある。

<関連サイト>

*Lion Mount Hamlet “Photo Gallery”

http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/615-photo_gallery/

*Lion Mount Hamlet “Events”

<http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/563-/>

(3) ウェリントン博物館 (Musée Wellington/Wellington Museum)

<http://www.museewellington.com> (フランス語版)

<http://www.museewellington.be/index.php?lang=en> (英語版)

ビジター・センターと道路をはさんで向かい側にある。「1815」の大きな文字が門扉に付いているので、何の建物かは一目瞭然だ。内部には、ワータルローの戦いでイギリス・オランダ・プロイセンの連合軍を指揮したウェリントン公爵 (Arthur Wellesley, The First Duke of Wellington, 1769-1852) の

蝨人形と執務机，フランス軍の使っていた国旗などが展示されている。ウェリントンはこの建物に司令部(Le Quartier/The Headquarters)を置き，1815年6月18日，ワーテルローの戦いの勝利を報告書にまとめ，ブリュッセルへ送付した。

ナポレオン戦争中，ウェルズリーはオランダでフランス革命軍と対戦し，1809年にはスペイン駐留のイギリス軍総司令官に任命された。1814年に南フランスへ進軍し，戦功によって爵位を得た。1815年，ウェリントン公爵はイギリス代表としてウィーン会議に参加した。1828－1830年にはイギリス首相を務めたが，軍人が首相になったイギリス史上唯一の例である。

ナポレオンの野望を打ち砕いたウェリントンは地名にもなった。イギリスの植民地ニュージーランドで1840年にウェリントンの町が建設され，1865年に北島のオークランド(Auckland)から同じ北島のウェリントンに首都が移された。

<関連サイト>

*Wellington Museum “Gallery: Reconstruction of the first battle of Waterloo (1705)”

http://www.museewellington.be/index.php?option=com_content&task=view&id=13&Itemid=14

最初のワーテルローの戦いは1705年に行われた。2005年8月20－21日に再現された戦いの写真が掲載されている。

*Royal Museum of the Armed Forces and of Military History Brussels—Belgium

<http://www.klm-mra.be/>

(4) 聖ヨセフ教会 (Paroisse Saint-Joseph/l’église Saint-Joseph à Waterloo)

<http://www.sjoseph.be/>

<http://www.sjoseph.be/content/view/17/32/>

ウェリントン博物館の向かいにある。緑色の丸屋根にはライオン像が乗ったロイヤル・チャペル (Chapelle Royale) があり、ユニークな姿を見せる。教会内には、ワートルローの戦いで戦死した兵士の追悼プレートその他、2つの世界大戦の戦死者を追悼するプレートも多数ある。

(5) ナポレオン最後の司令部 (Le Dernier Quartier-Général de Napoléon)

ワートルローの戦いで、ナポレオン最後の司令部が置かれていた場所。元々は、カイユ農場 (La Ferme du Caillou / Caillou Farm) であった。ライオンの丘から南に約 5 km 離れているため、車での移動が必要である。

<関連サイト>

* Province du Brabant wallon “Le Dernier Q.G. de Napoléon”

<http://www.brabantwallon.be/fr/Tourisme-et-loisirs/domaines-provinciaux/le-d.q.g.-de-napoleon.html>

* Attraction Touristiques et Musées de Belgique “Dernier Q.G. de Napoléon”

<http://www.attractiontouristique.be/attractions/att/culture-histoire-militaire-vieux-genappe-175-dernier-quartier-general-de-napoleon.html>

3. ドイツ

(1) ドイツ国旗

ドイツの国旗は上から黒、赤、黄色の横縞である。1813年にナポレオンの軍隊と戦ったプロセイン義勇兵の服 (黒マント、赤い肩章、金ボタン) を、後にドイツ統一を掲げて蜂起した学生組織がシンボルカラーにしたことに由来する (辻原, p.36)。

<関連サイト>

* ドイツ大使館 東京「ドイツ連邦共和国の概要」

http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/09__D_20Info/Informa-

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

tion/Uebersicht.html

*RegierunGonline（ドイツ連邦政府公式ホームページ）

<http://www.bundesregierung.de/Webs/Breg/EN/Federal-Government/federal-government.html>

*株式会社さらご「世界の国旗図鑑 ドイツ」

<http://www.sarago.co.jp/nfhtm/de.html>

*German Flag History

<http://www.german-flag-history.com/german-flag-history.html>

（２）ライプツィヒの戦い記念碑（Fördenverain Völkerschlachtdenkmal Leipzig e.V）

<http://www.voelkerschlachtdenkmal.de/joomla/index.php>

1813年10月、ドイツのライプツィヒ（Leipzig）で、プロイセン・オーストリア・ロシアの連合軍がフランス軍を破った。これがライプツィヒの戦い（諸国民戦争）である。翌年、連合軍はパリを占領し、皇帝から退位したナポレオンは、出身地コルシカ島の東にあるエルバ島へ配流された。フランスで王政が復活し、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世として即位した。

1898年から15年かけて、ライプツィヒ郊外に高さ91メートルの石の聖堂が建てられた（住所はPragerstr. 210）。古戦場はライプツィヒの中心部から東へ15分ほど市電で行ったところにある。近くにはロシア記念教会がある。

（３）4711

<http://www.4711.com/ekw+M52087573ab0.html>

<http://www.4711.jp/>（日本総代理店）

オーデコロン（Eau de Cologne）はフランス語で「ケルンの水」を意味する。フランス語でケルンは「コロニーユ」と発音するが、ローマの植民都市がそのまま都市の名になった。

1742年、イタリア人フェミニスがオーデコロンの名で販売したのが4711の

始まりである。フランス軍がケルンを占領した際、住居に番地を付けたが、店の番地4711がそのまま店名になった。オーデコロン4711は柑橘系の香りが特徴である。

(4) ベートーヴェンの生家 (Beethovenhaus)

<http://www.bethoven-haus-bonn.de>

ボンにあるベートーヴェン (Ludwig van Beethoven, 1770–1827) の生家を博物館にした。デスマスクなど、各種の資料がある。Virtual Tourに入るとカメラが360度動くので、実際に博物館の中を鑑賞し、博物館周辺の通りに立っているかのような臨場感が味わえる。

ベートーヴェンはナポレオンがヨーロッパに身分制度のない社会を作ると期待していた。そして、彼に捧げるつもりで交響曲「ボナパルト」を作曲していた。だが、ナポレオンの皇帝即位の報を聞いた作曲家は怒り、完成したばかりの楽譜の題名をかき消したという。交響曲は「英雄 (エロイカ) —ある英雄の思い出のために」と命名された (安芸, p.91)。これが、1804年に発表された交響曲第3番「英雄」変ホ長調 (作品55) の由来とされる。

なお、1809年に初演されたピアノ協奏曲第5番「皇帝」変ホ長調 (作品73) は、ピアノ付交響曲のような壮大な曲だったので、ピアノ交響曲の中の皇帝という意味で名付けられたようである (同上, p.100)。ナポレオンに捧げられたわけではない。1809年にフランス軍がウィーンを占領した時、ベートーヴェンはどう思ったであろうか。

1815年夏、ナポレオンが2度目の退位をし、ヨーロッパにフランス革命以前の秩序が回復した。ウィーン体制下で思想統制は厳しくなり、人々は反動から享樂的になった。ベートーヴェンはドイツの作家シラー (Friedrich von Schiller, 1759–1805) が人類愛を称えた詩を元に「歓喜の歌」(An die Freude) を作曲し、交響曲第9番「合唱付」ニ短調 (作品125) を完成させた。当局に検閲されれば上演が危ぶまれるところだったが、数々の困難を乗り越え、1824年にウィーンで初演された。

<関連サイト>

*NHK教育「ETV特集 俘虜たちのシンフォニー」(1994年7月26日放送)

<http://www.nhk.or.jp/archives/nhk-archives/past/2006/h070311.html>

徳島県鳴門市にあった板東俘虜収容所には、第1次世界大戦時、中国・青島で捕虜になったドイツ兵が約1000名収容された。2年10ヶ月の間、俘虜たちは地元住民との温かい交流を続け、技術や文化を残していった。第9交響曲初演は1918年6月1日だった。鳴門市とドイツは今も交流を深めている。

*ベートーヴェン・ハウス ボン「音楽の力。1917-1919年板東（日本）におけるドイツ捕虜収容所の文化的生活 ベートーヴェン・ハウス ボン 特別展示会」

<http://www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php/43872>

*鳴門市ドイツ館

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/>

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/ruhe.html>

(館報ルーエ)

ドイツ軍俘虜たちの日記、手紙、日用品など貴重な文物が保存されている。実物大の人形が第九を演奏するコーナーもある。

*NHK「その時歴史が動いた 第118回 ベートーヴェン第九誕生！～民衆に自由を呼びかけた交響曲～」(2002年12月18日放送)

http://www.nhk.or.jp/sonotoki/2002_12.html#03

*NHK教育「地球ドラマチック 第九交響曲物語 ベートーヴェン自由への祈り」(2007年12月26日放送)

<http://www.nhk.or.jp/dramatic/backnumber/78.html>

カナダの13Production、NFBが2005年に制作した。ベートーヴェンはシラーの詩「歓喜に寄せて」を元に、第4楽章「歓喜の歌」に全ての人間が兄弟として自由になる夢を込めた。一方、この歌は戦場で流され、ナチス・ドイツ、共産主義、民主主義の国がそれぞれの思想を

広めるために使われた。

*The European Union “European Symbols”

http://ec.europa.eu/delegations/tajikistan/what_eu/european_symbols/index_en.htm

歓喜の歌（Ode to Joy）は、欧州連合（EU）の歌ともなっている。

4. オーストリア

（1）シェーンブルン宮殿（Schloß Schönbrunn）

<http://www.schoenbrunn.at/>

継子に男児を渴望したナポレオンは、子どもを生まない年上の妻ジョゼフィーヌを離婚し、オーストリア皇帝フランツ 1 世の長女マリー・ルイーゼと再婚した。ナポレオンが関係を持った他の女性たちが妊娠したので、不妊の原因がジョゼフィーヌにあるとわかったからだという（レンツ，p.108）。だが、ジョゼフィーヌは離婚後も皇后の称号を持ち続けることを許された。

ナポレオンは1805年と1809年に2度ウィーンを侵攻し、シェーンブルン宮殿を居城として使った。彼が使用した部屋は「ナポレオンの間」と呼ばれる。一方、宮殿の大ギャラリーは、ナポレオン戦争の後始末を話し合うためヨーロッパ諸国が集まったウィーン会議（1814－1815）の会場となった。

ナポレオンの息子は1811年3月20日に誕生し、ローマ王（Roi de Rome）の称号を与えられた。パリでは101発の祝砲が鳴り響いた。父がエルバ島に流されると、母は息子連れ実家に帰った。希代の英雄の息子はライヒシュタット公（Herzog Von Reichstadt, 1811－1832）とよばれ、父が滞在した部屋を自分の居室の1つとして使っていた。ハプスブルク家の中で微妙な立場に置かれていたライヒシュタット公は、病弱にもかかわらず軍隊に入って無理をし、1832年に21歳の若さで亡くなった。現在、ナポレオンの間にはライヒシュタット公のデスマスクが展示されている。

（2）モーツァルト記念館（フィガロハウス）（Mozart House Vienna）

*Mozarthauss Vienna

<http://www.mozarthaussvienna.at/en/>

ウィーン市内で1784年から1787年までモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756－1791）が住み、歌劇「フィガロの結婚」を書いた建物を博物館にした。モーツァルトはウィーン市内で11回引っ越したが、現存するのはこの記念館だけである（後藤，p.76）。

フランスの劇作家ピーエル・オーギュスタン・ボーマルシェ（Pierre Augustin Caron de Beaumarchais, 1732－1799）は、フランス語で戯曲「フィガロの結婚」（*Le Mariage de Figaro*）を書いた。「フィガロの結婚」は「セビリアの理髪師」の続編で、全部で3部作となる。

戯曲「フィガロの結婚」は1784年4月に初演されたが、貴族に批判的な内容ですぐに上演禁止となった。この戯曲は、フランス革命の遠因になったとさえいわれる。もっとも、時計商の子として生まれたボーマルシェは、貴族の未亡人と結婚して貴族の地位を得、アメリカ独立革命にフランス国王の密使として植民地側に武器を提供した。つまり、彼は旧体制、すなわちアンシャン・レژیム（Ancien Régime）側の人物だった。

作品をめぐる貴族と対立したモーツァルトは、ボーマルシェの戯曲をイタリア語の歌劇「フィガロの結婚」（*Le Nozze di Figaro*）として作曲し、1786年にウィーンのブルク劇場で初演した。ウィーンでは上演禁止となったが、プラハで上演され、大評判となった。

ちなみに、当時のプラハはボヘミアの一部で、ハプスブルク家の支配下にあった。1618年、ハプスブルク家のカトリック化政策に反発し、国王の使者をプラハ城の窓から投げ出した。これが、ヨーロッパで最大かつ最後の宗教戦争となった三十年戦争（1618－1648）の発端である。1968年には、知識人が中心となり自由化と民主化を求める運動「プラハの春」が起きた。ソ連を中心に東欧5カ国のワルシャワ条約機構軍が侵攻し、運動は弾圧された。約20年後、1989年11月のベルリンの壁崩壊にチェコスロバキアの人々は少なからぬ貢献をした。1993年1月1日、チェコスロバキアはチェコとスロバキア

に分離し、プラハはチェコの首都となった。

<関連サイト>

* ウィーン市観光局

<http://www.wien.info/ja>

* Salzburg.info (ザルツブルク観光案内 英語版)

<http://www.salzburg.info/en/>

* Mozart Geburtshaus (モーツァルトの生家)

<http://www.mozarteum.at/museen/mozarts-geburtshaus.html>

ザルツブルク市内にある。1756年1月27日、ここでモーツァルトが誕生した。シェーンブルン宮殿のような黄色い壁が印象的である。

* Mozart Wohnhaus (モーツァルトの家)

<http://www.mozarteum.at/museen/mozart-wohnhaus.html>

1773年から1781年の間、ウィーンに出るまでモーツァルトが住んでいた、ザルツブルク市内の家。

* 国際モーツァルテウム財団 (Internationale Stiftung Mozarteum: ISM)
(日本語)

<http://www.mozart.jp/item/2685>

ザルツブルク市内に本拠地を置く団体。1841年に設立された音楽協会をもとに、1880年にザルツブルク市民が設立した。演奏会、博物館、研究の3つの事業を行っている。日本の支部は、日本モーツァルト協会である。

* 日本モーツァルト協会

<http://www.mozart.or.jp/>

* The Prague Castle “Old Royal Palace”

<http://www.hrad.cz/en/prague-castle/guidepost-for-visitors/old-royal-palace.shtml>

プラハ城公式ホームページ (Welcome to the Prague Castle) の中にある。三十年戦争の発端となる事件が起きた場所の写真と解説が掲

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

載されている。

5. イギリス

(1) トラファルガー広場 (Trafalgar Square)

1805年のトラファルガーの海戦で、ネルソン提督 (Horatio Nelson, 1758－1805) 率いるイギリス海軍が、フランスとスペインの連合艦隊を破った。ネルソンは戦死したが、フランス軍はイギリス上陸を断念せざるをえなかった。

スペインとモロッコに挟まれたジブラルタル海峡の領土は複雑である。スペインの最南端にジブラルタル (Gibraltar) の町 (英領) があり、アフリカ大陸の上にはセウタ (Ceuta) の町 (スペイン領) がある。

ロンドンのトラファルガー広場には、トラファルガーの海戦で戦死したネルソン提督の像が立つ。50mの高さがある円柱の上に、巨大な4頭のライオン像に囲まれて立つ。広場はロンドンの中心部にあり、北側にはヨーロッパ有数の絵画コレクションを誇るナショナル・ギャラリー (The National Gallery) がある。

ちなみに、トラファルガー広場には1947年以来毎年、ノルウェー政府が送るクリスマス・ツリーが立てられる。これは、第2次世界大戦中にドイツに侵攻されたノルウェーをイギリスが支援したことに対する感謝を示す。

<関連サイト>

* The National Gallery (UK)

<http://www.nationalgallery.org.uk/>

* Christmas in Trafalgar Square—Christmas tree lighting ceremony

<http://www.london.gov.uk/trafalgarsquare/events/xmas.jsp>

* Trafalgar Square—a brief history

<http://www.london.gov.uk/trafalgarsquare/history/index.jsp>

(2) セント・ポール大聖堂 (St. Paul's Cathedral)

<http://www.stpauls.co.uk/>

この地にサクソン人が最初の教会を建てたのは604年だった。その後、何度も火災に遭い、現在の建物は18世紀初めに建てられた。一方、第2次世界大戦の空襲は奇跡的に生き延びた。

バチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂に着想を得たデザインとされ、ロンドン市民から愛されている。1981年7月、チャールズ皇太子とダイアナ・スペンサー嬢（当時）の結婚式もここで挙行された。

地下聖堂にはイギリス史に名を残した人々の墓がある。1805年のトラファルガーの海戦でフランス・スペイン連合艦隊を破ったネルソン提督は、1806年にセント・ポールで国葬となった。1815年のワーテルローの戦いでナポレオンの軍を破ったウェリントン侯は、1852年に国葬となった。

第2次世界大戦中イギリス国民を鼓舞し、ロンドン市民に「セント・ポールを救え」と呼びかけたチャーチル元イギリス首相（Winston Churchill, 1874－1965）はここで国葬となり、その模様はBBCラジオとテレビで全英に伝えられた。

<関連サイト>

*St. Paul's Cathedral “Timeline: 1400 Years of History”

<http://www.stpauls.co.uk/Cathedral-History/Timeline-1400-Years-of-History>

*The Holy See（バチカン市国公式ホームページ）

<http://www.vatican.va/>

バチカン市国（The State of the City of Vatican）のホームページには、公用語のラテン語、イタリア語、フランス語の他、英語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語がある。宗教上の理由から国連には加盟していないが、オブザーバー（投票権はないが審議に参加する）の地位を有する。

（3）大英博物館（The British Museum）

<http://www.britishmuseum.com>

ナポレオンはイギリスのインド・ルートを断つため、フランス軍をエジプトへ派遣した。エジプト遠征中の1799年、ロゼッタ（現地名ラシード）で巨大な石が発見された。ロゼッタ・ストーン（Rosetta Stone）は紀元前196年に作られたプトレマイオス5世の頌徳碑の一部で、古代エジプトのヒエログリフ（聖刻文字）、デモティック（民衆文字）、およびギリシャ文字の3種類で刻まれていた。

1801年、イギリス軍がカイロに迫ると、フランス遠征軍に伴われてきた考古学者たちはロゼッタ・ストーン他の資料、標本等を持って、アレキサンドリアに避難した。だが、1801年8月に締結されたアレキサンドリアの占領協定で、遺物をイギリス軍に渡すこととなった。1802年、ロゼッタ・ストーンはイギリスのポーツマス港に到着し、ロンドンの考古学協会から大英博物館に移された（キャロル・アンドリュース『ロゼッタ・ストーン』日本語版、大英博物館出版部、1989年、pp.9-12）。

<関連サイト>

*Rosetta Stone（ロゼッタ・ストーン）

http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/highlight_objects/aes/t/the_rosetta_stone.aspx

（４）ウォーターloo橋（Waterloo Bridge）

Tour UK (uk) “Waterloo Bridge, Embankment Embankment and Waterloo, London WC2 and SE1”

http://www.touruk.co.uk/london_bridges/waterloo_bridge1.htm

ワーテルローの戦いの勝利にちなんで名付けられた。この橋は、ヴィヴィアン・リー主演の映画「哀愁」（原題Waterloo Bridge。1940年、イギリス制作）の舞台になった場所でもある。

ちなみに、戦後日本で公開された「哀愁」は劇作家・演出家の菊田一夫に影響を与え、ラジオドラマ「君の名は」を生んだ。日本での舞台は、東京・

有楽町（住所は銀座5丁目）の数寄屋橋に置き換えられた。

（5）ウォータールー駅（Waterloo Station）

4つあるロンドンの主要駅の1つ。他の主要駅は、キングズ・クロス（King's Cross）、ヴィクトリア（Victoria）、パディントン（Paddington）である。

かつて、ウォータールー駅はロンドンとパリ、ロンドンとブリュッセルを結ぶユーロスター（Eurostar）の発着駅であった。現在、ユーロスターは大英図書館側のセント・パンクラス（St. Pancrass）駅から出発する。同駅は、ハリー・ポッターシリーズで有名になったキングズ・クロス駅に隣接する。

<関連サイト>

*Visit London—Official City Guide & London Hotels（ロンドン観光案内）

<http://www.visitlondon.com/>

*Transport for London（ロンドン交通HP）

<http://www.tfl.gov.uk/>

（6）ウィンザー城「ウォータールーの間」

<http://www.royal.gov.uk/TheRoyalResidences/WindsorCastle/Virtual-Rooms/Overview.aspx>

ウィンザー城（Windsor Castle）の歴史は、11世紀にウィリアム征服王が木造の砦を築いたことに始まる。現在はイギリス王室ウィンザー家の居城で、エリザベス2世はここでよく週末を過ごす。女王の滞在中はイギリス国旗が掲げられる。

城の内部には「ウォータールーの間」がある。城の正門前では、ロンドンのバッキンガム宮殿と同じく衛兵交代式が行われ、見物客が多い。

ウィンザーの町は、ロンドンの主要駅の1つパディントン駅から電車に乗り、1度乗り換えて、約40分の距離にある。ウィンザー城の近くには、1440年にヘンリー6世が創設した名門パブリック・スクール、イートン校（Eton

College) がある。寄宿制で、男子学生のみ受け入れる。

<関連サイト>

*The Official Website of the British Monarchy (イギリス王室公式ホームページ)

<http://www.royal.gov.uk/>

*The Royal Borough of Windsor & Maidenhead

<http://www.windsor.gov.uk/>

6. アメリカ

(1) 国立自然史博物館 (Smithsonian Institution National Museum of Natural History)

<http://www.mnh.si.edu/>

アメリカの首都ワシントンにあるスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) の国立自然史博物館には、サファイアのような深い青色をした「ホープ・ダイヤモンド」の首飾りがある。この他、マリー・アントワネットのダイヤモンドの耳飾り (ペアで計25カラット)、ナポレオンが再婚したジョゼフィーヌに与えたダイヤモンドの首飾りなどが所蔵される。

(2) 「ホープ・ダイヤモンド」 (Department of Mineral Sciences, Hope Diamond)

<http://mineralsciences.si.edu/hope.htm>

国立自然史博物館 (在ワシントン) のページ。持ち主は不幸になるというホープ・ダイヤモンドの歴史、紫外線による分析結果などが載っている。ルイ14世が所蔵していた時は「フランスの青いダイヤモンド」と呼ばれ、69カラットあった。その後カットされ、現在は45.52カラットある。

(3) 「マリー・アントワネットのダイヤモンドのイヤリング」 (The National Museum of Natural History (USA) “The Dynamic Earth, Marie Antoinette

Diamond Earrings”

http://www.mnh.si.edu/earth/text/dynamicearth/6_0_0_GeoGallery/geogallery_specimen2.cfm?SpecimenID=4028&categoryID=1&query=marie%20antoinette%20diamond

国立自然史博物館（在ワシントン）のページ。マリー・アントワネットが所蔵していたダイヤモンドの耳飾りは、14.25カラットと20.34カラットの重さがある。18世紀に産出されたダイヤモンドの標本としても、貴重な価値がある。

（４）「ナポレオンのダイヤモンドのネックレス」(Department of Mineral Sciences, Recent Research on the Napoléon's Diamond Necklace)

<http://mineralsciences.si.edu/collections/napoleonnecklace.htm>

国立自然史博物館（在ワシントン）のページ。ナポレオンがマリー・ルイズに送ったダイヤモンドの首飾り、ダイヤモンドの首飾りを身に付けたマリー・ルイズの肖像画などが掲載されている。ダイヤモンドを紫外線で分析した写真でダイヤモンドは、青、緑、紫と様々な色に輝く。

ナポレオンは子どもを生まない皇后ジョゼフィーヌを離婚し、ハプスブルク家の皇女マリー・ルイズ（ドイツ語読みで MARIA・ルイゼ）との結婚を決意した。18歳の皇女は人身御供さながらに、外見は決して冴えない40歳の男に嫁ぐことになった。しかし、人心掌握に長けた花婿は国境まで花嫁を迎えに行き、様々な贈り物でその心を捉えた。

このページには、マリー・ルイズがネックレスを身に付けた肖像画とネックレスの入っていた箱の写真も掲示されている。

（５）「呪い！」(Curses!)

http://www.pbs.org/treasuresoftheworld/a_nav/hope_nav/hnav_level_2/level2_pitch_curse_hopfrm.html

アメリカPBSのページ。ホープ・ダイヤモンドの持ち主を全て列挙したサ

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

イトである。現在の所有者が「アメリカ国民」なのは、国立アメリカ自然史博物館（スミソニアン協会）が所蔵するからである。

（６）「呪いにあらず」（Curses debunked）

http://www.pbs.org/treasuresoftheworld/hope/hlevel_1/h5_debunking.html

アメリカPBSのページ。ホープ・ダイヤモンドの呪い伝説が誤りであることを証明した。